

米田淳一

北
急
電

鉄

の

ヘッドライト

震災



迎えつつあった春

それは春を迎えつつある3月の金曜日だった。
空は青く澄んで晴れていて、日差しも温かい。

そのなか北急電鉄は、西新宿の新本社ビル・西新宿ロマンスタワーへの引っ越しの最後の作業を行っていた。

「お昼おいしかったですね」

「うん。おいしい引っ越しそばだった。『まつとく』のおそばはいつもおいしいからね」

「でもこれからは前の社屋の時より出前が早く届くようになりますね」

北急社長・樋田はうなずいた。

「さて、あともうひとがんばりだ」

彼は秘書たちと一緒に部屋に入った。



ハイバックチェアにデスクの上にコンパクトPC。その傍らには鉄道模型がささやかに飾られている。

「しかしこの社長室、やっぱり狭くありません？」

樋田は笑った。この社長室は19階建ての新本社ビルの15階にある。

「応接室は別にあるから、僕もオープンデスクで十分と思うぐらいなんだけど、僕は社長としてちゃんとしないと、みんなが迷惑する。

社長がオープンデスクじゃ、本来応接室を兼ねた重役室も、工場長室もかれらの事務量から必要なのに廃止しなくちゃいけないからね。

えらくなるってのは居心地のなんとも悪いもんさ」

「でも来週から東京スカイツリーを見ながら仕事になりますね」

「ああ。君たちのおかげだよ。この新本社ビルも。北急もあの悪夢みたいな上場停止・鉄道廃止寸前からよく立ち直ったものだと思うよ」

「社長の力も大きいですよ」

秘書がほめる。

「もう一度言って」

「やですよ」

昔のTVコマーシャルの言葉で笑い合う。



「社長、ホールでのオープン記念セレモニーの調整ですが」
「ああ。こけらおとしの『北急の歴史展』だね。必要な資料は」
「搬入完了しました。物品倉庫Bにあります。展示はこれから庶務チームBが行います」
「貴重なお預かりものだ。傷などつけないように注意して。」
「JRも明日から新ダイヤだ。いろいろわかるだろうが、普段通りに」
「はい。社長、今日の夜の会合の予定は2件です。国土交通省鉄道局との連絡会、そして北急HDグループ経営戦略会議と、そのあとの懇親会です」

3月19日 14時46分

そのとき、ビルの全館放送の警報が鳴った。

「緊急地震速報！緊急地震速報！」

「これは大きいぞ！ 何かつかまって！
すぐに机の下に潜れるように膝を床について！」
樋田が言う直後、大きな揺れが襲った。
「割れないと思うけどガラスに気をつけて！」

悲鳴がどこかでいくつも聞こえる。

しかし、揺れは周期が非常に長く、社長室では船のような揺れだ。
「揺れてますね」
「ああ」
「大きい揺れですね」

大きな揺れの中、みんなが互いの目を見合わせる。

「揺れ、長いですね」

「そろそろ収まるかな。屋上の制震装置が効いてるかな」

「そうですね」

皆冷静だった。

「揺れ、収まってきましたね」

「でもずいぶん大きい地震ですね」

「ああ。かなり大きいな。これは」

「なんか、まだ揺れているような」

「いや、収まった」

樋田は立ち上がった。

「TV、つけられるか」

「はい」

秘書室のテレビがついた。

「東北三陸沖でマグニチュード8.8の地震が発生しました。気象庁より大津波警報が発令されています。海沿いのみなさん、ただちに高台へ避難してください。くりかえします、避難してください」

そのとき、樋田は言った。

「言ってるアナウンサーが一番動揺してるね」

それでもみな、笑えなかった。

「運転区と連絡を取って」

「やってます。相模大川指令所は全線での列車停止を発令しています」

「まず列車停止の確認と、線路の安全確保を。訓練通りやろう」

「はい！」

みなそう言うが、それぞれに不安の顔を隠せなかった。

その間もテレビは、警報を流し続けている。

11日15時30分

15時30分

「北急相模大川指令所より。全列車の無事を確認したと応答がきました。現在全列車停車中です」

「東北各県から関東全域、鉄道はすべて止まっています」

報告が上がってくる。

「信号と電力は」

「現在確認中です」

「被害が生じていないかを確認。それと特にお客様に怪我がないか、留意して」

皆電話で各所と連絡を取り合う。

「現在確認中です」

「慌てるな。ゆっくり確実に」

樋田はそう言うと言いつつ、窓の外を見た。

「日没が近づいてきたな」

口をついてそんな言葉が出た。

16時14分

「申し訳ありません、回復のめどはまだなんです」

北急新宿駅では帰宅しようとする大勢の人々がみな駅員に聞いてくる。

駅の案内表示はすべて『只今地震のため、全線で只今運転を見合わせております』になったままだ。

「他社線も運転していないようです。おそらく線路の点検中です。我々も現在安全確認中です」

「申し訳ないですが、ホームに降りても列車はまだ当駅から発車できません！」

そう言いながら、皆、業務用インカムに耳を澄ませる。

16:14、神奈川県厚木市山際。無事平穏です。国道の交通にも目立った影響はなく、急を要する事態は今のところないようです。

posted at [16:17:22](#)

災害時Twitter情報を発信する場合は、RTによる混乱を避けるため本文冒頭に時刻をいれ、再RTは慎み、それでもRTする場合はその冒頭の時刻を省略しないようにお願いします。時系列が混乱するとデマが生じやすくなる事例を確認しています。

posted at [16:20:42](#)

[お願い] 災害時Twitter情報を発信する場合は、RTによる混乱を避けるため本文冒頭に時刻をいれ、RTする場合はその冒頭の時刻を省略しないようにお願いします。時系列が混乱するとデマが生じやすくなる事例を確認しています。

posted at [16:39:20](#)

17:38、ご協力ありがとうございます。現在Twitter情報以外得られない方もいらっしゃるようですが、現在官公庁が機能し消防活動の実施されている状況もTV情報に上がってきています。大規模災害ですが対応も進み始めています。

posted at [17:39:36](#)

17:42、都内の被災状況が現在TV上に流れています。宮城県内の情報が少なく心配されますが、Twitterよりも安全確保のほうが必要な段階です。福島茨城の方は特に安全を確保してください！

posted at [17:44:02](#)

17:47、一般知識としての余震の可能性は今後もあります。被災なさった方、情報不足の場合はすみやかに避難場所へ避難し、孤立しないようにご注意ください。余震はなおも散発的に起きています。

posted at [17:48:38](#)

17:48、指定された避難施設にはラジオやTVなどの情報や暖があります。被災地でモバイル機でTwitterをご覧の方、状況は続きそうです。避難施設を利用し、モバイル機の電池の温存を図りましょう。

posted at [17:53:12](#)

17:59、現時点で被害状況は調査中ですが、被災地の方はTwitterよりもご近所の方とともに避難所への避難を優先してください。今回の地震は災害規模が大きく、Twitter情報だけでは状況把握は困難です。

posted at [18:00:50](#)

「社長！」

樋田はその新宿駅の運転士・駅員詰め所に現れた。

「みんな、無事だったか」

「ええ。でも保線と信号、電力のみんなは今必死です」

折り返し列車を運転するはずだった運転士たちが、点検待ちでうなだれている。

その中には梅沢も、来嶋もいた。

「帰宅難民も心配だが、宮城や福島の情報が入らない」

何人かが顔を青くしている。

TVは大津波警報をまくしたてている。

「緊急地震速報！」

再び揺れが襲った。

「みんな、ヘルメット確認！」

「大丈夫か！」

「ああ。またかちくしょう、いったい何回ゆれたらすむんだ！」

18時04分

人々は鉄道での帰宅をあきらめ、徒歩で帰ろうと歩き始めた。
「NHKが人々に無理な帰宅をしないようアナウンスしています」
「だろうな。今日の最低気温は0度ちかくだ。無理な帰宅は危険だ。寒さと疲労は恐ろしいぞ」
「高倉屋百貨店が帰宅できない方にホールを開放しています。寒さがしのげます」
「うちもやりましょう！」
「そうだな。百貨店と新本社のロマンスホールで受け入れよう」
「でも新本社ビルはまだ正式オープン前ですよ」
「いいからやってくれ。ホールはすでに使用可能だ。
それと暖かい飲み物も出そう。
こういうときはお互い様だ。
本社の人間は皆、対応に回ろう。
この状態では我々も帰宅できない。
今夜はここで過ごそう」
傍らで本社社員が電話をかけている。
「畜生、電話が繋がらない」
「電話会社で発信規制がかかっているんだ」

18:04、NHKより、首都圏では交通機関の復旧は本日中には期待できない状況とのことです。無理な徒歩での帰宅はさけ、現在安全な場所で今夜の寒さを凌いでください。無理な帰宅は危険とのことです。

posted at [18:07:26](#)

18:07、本震と同規模の余震は少ないですが、しかし今回は本震が大きいために無視しえない危険があります。無理な帰宅、無理な自宅待機は疲労と寒さで危険です。今夜は無理せず、避難所に避難して暖を取ってください。

posted at [18:12:09](#)

18:12、日没です。まだ大津波警報は発令中です。避難所に避難したまま、暖をとって今夜をしのぐしかありません。無理な徒歩帰宅は寒さと疲労を含めた不測の危険があります。今夜の鉄道などの交通機関の復旧は期待できないとのことです。（NHKより）

posted at [18:17:47](#)

18:24、東京地方の屋外は最低気温で3度、北風がやや強くとのことで、無理な徒歩での帰宅は危険です。暖の取れる避難所への避難とそこでの待機を優先してください。駅や交通機関での待機は今夜中の交通機関復旧は見込めません。

posted at [18:29:42](#)

18:34、NHK-TVで気象庁発表中。観測史上最大規模の地震とのことです。避難場所(23区) | 東京都 < <http://cgi.mobile.metro.tokyo.jp/aps/tosei/bousai/hinan.html> >を参考に、無理な徒歩帰宅は避けてください。

18時39分

そのときだった。

「JRが本日中の運転全面停止を発表しました！」

皆どよめいた。

「なんだって！ 駅にこんなにお客さんがまだいるんだぞ！」

「いったいどうなるんだ！」

そのとき、腕組みをしていた指導運転士の梅沢が口を開いた。

「どのみち今日中は無理だ」

樋田も頷いた。

「どんなに急いでも今日0時まで復旧は不可能だ。

JRは路線網が大きすぎる。点検には時間がかかる。

むりに復旧しようとして、お客さんを待たせてもお客さんが困るだけだ。

これも見識だろう。無理な運転再開は危険だ」

「でも、このお客さんたちは、家に帰れませんよ」

「安否確認のために電話も輻輳しています！ つながりません！」

「我々も早めにアナウンスすべきじゃないですか」

樋田は考え込んだ。

TVはそのとき、帰宅難民として新宿駅の表側の雑踏を映していた。

「社長！」

樋田は険しい表情を隠せなかった。

「緊急地震速報！」

また警報が鳴り、皆が不安気に、天井で揺れる蛍光灯を見上げる。

「社長！」

樋田は声を絞り出した。

「みんなはどう思う？」

梅沢が答えた。

「ここでの無理な運転は事故を招きます。危険すぎます」

「でもこの寒さです。帰宅難民の人たちの命もかかっていますよ」

「だが帰宅難民で死ぬか、鉄道事故で死ぬかになるぞ。

どちらも選びたくないが、今はほかにない」

言葉が詰まる。

皆、沈痛な面持ちで黙り込んだ。

「信号部、電力部、施設部が一番無理をすることになる。

この大きな地震だ、無理はこれからしばらく続くだろう。

今は無理しない方が良い。

止める勇気も必要だ。

JRの判断ももっともな話だ。JRは路線が長く、ダイヤの範囲も大きい。

安全こそ第一の使命だ。JRの判断もひとつの見識だ」

「まず、信号・電力・保線のみんなに設備確認を」

「はい！」

18:39、JR東日本がNHKにて東北地方・首都圏のすべての列車の運転取りやめを発表しました。無理な徒歩帰宅は危険ですのでしないでください。駅で待っていても運転は再開されません。避難所への避難をお願いします。

posted at [18:43:45](#)

18:43時点です。RT [@1969yassan](#): RT: 帰れない人は全国避難所一覧 <http://bit.ly/eyr0cZ> 東京都内の避難所マップ東京総務局 <http://bit.ly/gFa8up>

posted at [18:44:55](#)

18:50現在RT [@takezo1969](#): RT [@nyanmi](#): 寒くなってきました。【無料開放まとめ】お茶ノ水→明大リバティタワー】新宿→高島屋タイムズスクエア】池袋→立教大学11、14号館】浜松駅→浜松市中区田町万年橋パークビル7Fマチノバ】品川→品川プリンスホテル】

posted at [18:51:36](#)

18:52 私に何もできることはありませんが、被災地や帰宅を諦めて避難している方、みなさんのことを世界中が心配しています。寒い夜になりますが、明日になれば状況は変わります。まず落ち着いてしのいで下さい。NHK報では自衛隊の支援活動も始まっているとのこと。

posted at [18:56:11](#)

19時47分

「自動販売機の無料開放が始まりました。自動販売機の飲み物が自由に飲めるようになりました」
「帰宅難民の受け入れ、あちこちで始まっています。大きな学校、百貨店が避難所になっています」
「北急警備で新本社ビル・ロマンスホールへの誘導をしています」
「ロマンスホールでの飲み物提供、順調ですが避難者なおも増加中、このままでは容量をオーバーします」
「点検は」
「半分以上進みましたが、運転再開のめどは深夜になりそうです。
通常の終電のあとになりそうです。急げば0時に再開できます」
「よくやってくれた。皆にあと一息だと伝えてくれ」
「はい！」
「戦後最大の大災害になるのは確実だ。
日没で被害規模も分からないが、津波を受けた地域はおそらく」
そこで言葉が途切れた。
そのあとの言葉を、皆誰も、想像できてわかっていても、いえなかった。

22時31分

「近隣の帰宅困難者避難所、つぎつぎと満員になって受け入れを中止しています！」
「帰宅困難者、さらにますます増えています！」
「どうします、社長」
詰め所のモニターに駅前の人々が見えている。
「どうしても、0時過ぎでの運転は無理だ。
そのことをアナウンスするしかない」
樋田はまだ考えていた。
皆が重たい空気に飲まれていた。
「電力と信号、保線、急げば0時には復旧できます。
でも、我々が運転できても、乗り換え他社線の復旧は期待できません。
そこで混乱が起きることも多いと思います」

そのとき、駅務の若い女の子が声を上げた。
「お客さんのために、できることは全てすべきです！」
「だって、あとが」
「今しなければ、この寒気の中路頭に迷う彼らの命に、『あと』はないんですよ！」
梅沢がうなる。
来嶋は言う。
「社長の判断を仰ぎましょう」
樋田社長は苦悩の色を隠せなかった。
「戦後最大の大災害だ。我が社も、厳しいことになる。
まして公共輸送機関の最大の使命は安全だ」

そのとき、彼女が叫んだ。
「今がなければ『あと』がないんです。
安全確保は皆が徹底してやってきていたんです。
安全です。みんなを信じてください。
私はみんなを信じています。
きっとこれから、長い復旧と復興の戦いがあるでしょう。
その夜明けに向けて、我々は向かわなくちゃいけない。
ヘッドライトをつけなくちゃ、列車は夜明けに向けて走れません！
いまこそ、私たちがヘッドライトをつけるときです！」

「電力、余力あります！」
電力司令が叫ぶ。
「信号、ぎりぎりですが間にあいます！」
そのとき。

「私たちが手伝います！」

BCE、ブラウンコーストエクスプレスのクルーのパーサーが言った。

日本一周クルーズをする豪華寝台列車、BCE。たまたま今日は整備のためにクルーが休んでいたのだった。



「我が社のクルーズトレインは今運転できないでしょう。

でも我々も鉄道員です。現業で錬成したうえで、BCEに乗っています。

だから、こういう時の運行の補助は出来ます」

「NFEクルーも同じです！」

まだ就航したばかりのNFE、ナチュラルファンタジアエクスプレスのチームも声を上げる。

「今こそです。

今こそ、点けましょう、ヘッドライトを！」

樋田、決断する。

「わかった。

我が北急は、これから終夜運転を開始する。

0時を始発とした運用と運転ダイヤを考えてくれ」

皆、「はい！」とうなずき、走り出した。

19:47時点 RT:自動販売機はサントリーだけでなくコカコーラの自動販売機も無料開放対応しています。この情報をあまりTLで見かけないので再拡散。

posted at 19:48:34

19:51時点、通常の訓練していない人が歩ける距離は20km、東京・新宿から西側と考えると相模原・八王子ですら困難な距離です。しかも今夜は寒いです。お勤めの方は安全が確保された会社などで夜をしのぎ、明日まで待機した方が良さそうです。

posted at [19:56:15](#)

20:28時点 RT:RT @NHK_PR: NHKの各放送局がまとめている各地の災害情報はこちらからご覧いただけます。 <http://www.nhk.or.jp/saigai/jishin/>

posted at [20:29:22](#)

20:31 一部バスの運行再開という情報がTL上にありますが、同じTL上で幹線道路はひどい渋滞でほとんど進めない状況とのこと。今夜は寒くなりますので、無理な帰宅は控えるべき状況であることは変わらないようです。

posted at [20:33:52](#)

20:43時点 RT:RT:RT:RT: 【拡散希望】 フォロワーさん多い人お願いします！神奈川県避難所一覧 <http://bit.ly/elzXlg>

posted at [20:44:06](#)

20:44時点 RT: 【無料開放訂正】文化服装学院・新宿高島屋、収容容量が一杯で満員だそうです。 代替先は東京都庁第一、第二庁舎... <http://deck.ly/~EynFH>

posted at [20:47:52](#)

先生も担当さんもご無事のように良かったです。こちらは無事です。停電もこちらはありません。

posted at [20:53:18](#)

20:54 万が一の余震に備えて、みなさま、今夜お休みの際はベッドサイドに歩きやすい靴を置いてください。万が一ですが、裸足での避難は大変危険です。

posted at [20:56:49](#)

20:57 NHK天気予報、今夜は非常に寒くなると報道。夜間の無理な移動は危険です。地下鉄やバスが一部再開しても乗り換え先が運休の場合もありますし、またバス・タクシーも道路が激しく渋滞していて動けない状況です。無理な帰宅にならないか、今一度ご注意ください。

posted at [21:01:29](#)

21:19 夜間の無理な移動は危険です。今夜は特に寒く、地下鉄やバスが一部再開していますが、乗り換え先の交通機関が運休の場合もありますし、またバス・タクシーも道路が激しく渋滞していて動けない状況です。無理な帰宅にならないか、今一度ご注意ください。

posted at [21:21:29](#)

長い夜の始まり

22時00分

「線路の安全を確保しました。あとは試験列車を走らせての確認のあと、臨時ダイヤに沿っての運転ができます」

「しかし新戸田から半原までの試運転列車が確保できません」

その時、来嶋がいう。

「今日新戸田着の甲種の車両があるじゃないですか」

「正気か？ 甲種されてきた車両をいきなり使うなんて」



「製造してくれた重工を信じましょう。彼らもプロです。」

そして、今は一両でも多くの釜と車があるんじゃないでしょうか」

来嶋はそう言い切った。

「そうだ」

梅沢がうなずいた。

22時20分

「運転するのは、君だ」

新戸田にいる彼は来嶋にそう言われた。

「そんな、まだ自分は」

「促成栽培だが、君にはできる。それだけの腕を仕込んだ」

来嶋が肩を叩く。

「君が、その星ガマを運転するんだ」

新戸田で彼の目の前には、旅客用の青いEF510が待っていた。

「キャブに登り、シートのビニールを取れ」

「でも、それは甲組運転士だけの荣誉では」

来嶋がいう。

「大丈夫。

君も甲組だよ。

君には教えられることは教えた」

彼は、軽く震えた。

「さあ、ようこそ甲組へ、だ。

君に教えられることは教えてある。

練習の通りにやれば良い。君にはその力がある」

22時10分

「帝都急行線、徐行運転での運転再開の様です」

「ほかの各社線も運転再開を発表します！」

「そうか。同じ判断だな。我々もやろう！」

「はい！」

22時20分

新戸田で、彼はJRからの甲種輸送の受け取りを終え、北急線での運転のための準備を進めていた。

ピカピカの車体がかろうじて停電を逃れた新戸田駅の明かりの光に映える。

その手すりをとってキャブに登り、シートのビニールを外す。

「手順はわかってるな。ゆっくりやれ。夜は長い。

本当は新車導入記念のセレモニーをするはずだった。

それはできない。本当にかわいそうな釜になってしまったが、愛してやろう。

この釜も、大事な我々の仲間だ。

釜を信じる。それが運転士、機関士だ」

彼は手順通り運転準備をしていく。

ナビコン、キー差し込み。

モニタ装置起動。

ディスプレイよし。

予備電源、タンクエア確認。

起動よし。

パンタ上げ、コンプレッサー起動。

電流よし。

「ATSよし！」

いとおむように、ブレーキ試験をした。

単弁、全弁、圧力正常、応答正常。

「前照灯点灯！」



新車・EF510 501の4灯のライトが、闇を照らし出した。

真っ暗闇の中、銀色の二条に光る線路を見る運転台の列車無線に、樋田社長の声が流れた。

「社長の樋田だ。

みんな、聞いてくれ。

国立天文台によると、明日の夜明けは5時57分だ。

その夜明けになったら、この災害の大きさが明らかになる。

たぶん、我々の心が根元からボッキリと折れるような、とてつもない惨状だろう。

そしてその惨状は、さらに拡大するかもしれない。

そして、それがやり過ごせても、その後には復旧と復興の長い道が待っている。

おそらくもう立ち上がれないほどのダメージだ。

だが、それでも我々は、今、ヘッドライトを灯すことにした。

何があっても、断固として、お客様を、線路を守り、運転し、お客様の命を救う。

我々は、何があっても、絶対にこの災害に、屈しない！」

「9901列車、承知！」

「9806列車、承知」

「半原駅より、よねでん線全線、承知」

応答の音が沸き起こる。

これから長い夜に、列車が走りだす。

困難な長い夜を、朝に向けて。

22:04現在 RT:原子力緊急事態宣言、放射能漏れなく被害出る状況でない：ロイター通信

<http://t.co/61uJcL1> 現在稼働中の電源は8時間程度電池寿命があり、その後も1日程度は余裕があ

る

posted at [22:06:06](#)

22:23時点、丸子橋（多摩川）、歩行者と車多数。品川（東京）、歩行者多く車道にあふれています。ほかの都内からの道路は歩道車道ともに渋滞が激しい模様。防寒と疲労による怪我防止と体力の温存に留意してください。ご無事を願っております。

posted at [22:31:09](#)

22:34現在受信:青山学院 避難所の記念館が満員になりつつあります。この情報が間に合わなかった方には、一時的にお休みいただける講堂へご案内していますが、そちらもそろそろいっぱいです。近くの帰宅支援場所は 都立広尾高校 第一商業

posted at [22:35:28](#)

22:36 [拡散希望情報をお持ちの方へお願い] 貴重な情報ありがとうございます。情報発信時刻を本文の冒頭に記述をお願いします。拡散希望で連鎖的にRTされたtweetは6時間以上RTされ続け、せっかくの情報が虚報になることもあります。通報感謝ですが、時刻明示をお願いします。

posted at [22:42:45](#)

22:42 なお、 [地名] 開放 によるTwitter検索の場合、検索語に -rt を追加することで非公式RTを検索結果から排除して見やすくすることができるそうです。検索利用でお困りの方に。非常に寒い夜ですが、なんとか乗り切りましょう。

posted at [22:46:57](#)

22:47、現在NHKのTV放送では第1では避難・被害情報、教育TVでは安否情報が放送されております。一般報道機関の活動による情報が追いついてきました。もうしばらくで私は節電協力のために本務機を停止し、tweetを終了します。寒い不安な夜ですが、皆様のご無事を願っております。

posted at [22:52:33](#)

23:39、避難なさっている方々へ。避難中の方はTwitter なんか見ないですみやかに防災職員の指示で避難しましょう。二次災害の可能性はまだあります。そこで防災職員は地域でのこの事態を想定して訓練を重ねています。Twitterよりも地域に根ざした情報でずっと有益です。

posted at [23:41:12](#)

避難所で夜を迎えている方々、お寒くご不安でしょう、暖かいものがあれば少しでも口にして、そして周りのご高齢の方やおひとり様に声をかけてください。他愛のないことでもいいはず。最悪の状態での出会いですが、無言ながら助けを彼らは求めていますし、またケータイなどの電池の温存になります。

posted at [23:43:24](#)

不安で寒く暗い夜ですが、現在徐々に交通機関も停電断水からの回復のtweetが増えてきました。回復のため尽力したライフライン職員の方々、ありがとうございます。また、また困難な家路を乗り越えたとのtweetも増えています。ともあれご無事でなによりです。

posted at [23:44:20](#)

今は全貌把握し切れていないので、夜の中も被害があり、その上明日 朝になれば具体的に数字と映像でわかってショックを受けますと思いますが、まず明日は明日のこととして、今は暖をとり休息し、それぞれにこのTwitter を見られている最低限の安全への感謝を分かち合いましょう。

posted at [23:47:10](#)

明日は今日の昼と同じぐらい暖くなるようです。とはいってもまだまだ本格的な春には遠いかもしれませんが、今はまずこの夜を超えましょう。Twitterをご覧の方、電池の残りに注意しながらTLの話題で夜をしのいでください。すばらしい仲間が皆さんのためも含めて今もtweetしています。

posted at [23:51:34](#)

つらく悲しい災禍ですが、我々の祖父祖母、そしてそのまた祖父祖母 も、それを乗り越えて我々に命を継いでくれました。まだまだ早い話ですが、我々にもきっとそれができる力があるはず。あと5時間とちょっとで明日の日 が昇ります。それまで少しでも体力を温存し、お休みください。

posted at [23:55:24](#)

相模大川運転区に来嶋運転士が戻ったのは、朝も明けない通常の始発電車の運転の前だった。

「帰着報告します。

運転士来嶋、仕業行路X07A、無事帰着しました」

「ご苦労さま」

運転助役がねぎらう。

「臨時運用だから、みんな余計気を遣うだろう。本当にご苦労だった」

「私も。Xの仕業番号の仕業、初めてです」

「ああ。運用システムに用意されていたんだが、使うことがないことを願っていたよ」

「ええ。もう二度と見たくないですね」

「まったくだ」

「それに」

来嶋は運転区の大部屋を見て、口にした。

「なんか、空気が重いですね」

「ああ。みんな疲れてるよ。

でも、電力区や信号区はもっと大変だ。彼らは復旧したあとからもずっとの勤務だったからな」

「ええ。ほんと、彼らには感謝してもしきれないですよ」

助役はうなずいた。

その向こうで運用部と梅沢指導運転士が、いつになく真剣な顔で相談している。

「どうしたんでしょう」

「いや、始発からのダイヤ編成の相談中だ。

正月の終夜運転のようには行かないからな」

「そうですね。でも、するんでしょう？」

「できるか？」

助役が聞く。

「私はできますけど、でも」

その間、点けっぱなしのテレビが騒いでいる。

津波の猛威、そして炎上中の市街の画像が繰り返し流されている。

「太平洋岸も津波でやられたうえ、日本のすべての海岸に津波がくる可能性がある」

「それと、原発がやられた」

「でも昨日は大丈夫って」

「いや、それがうまくいかないらしい。電源が切れたとか何とか」

「発電所なのに自分の使う電気が作れないんですか」

「あれって難しいんですよ。来嶋さん知らなかったんですか」

一人が声をかける。

「仲間に東電の運転員がいるんです。よく一緒に遊ぶ仲です。

彼が言うには、原子炉って、ただ止めるだけならそれはすぐにできるんです。

でも、原子炉は止まっても熱が出ます。

数パーセントの余熱でも、炉の出力が大きすぎるなかの数パーセントですから、熱がすごいです。

そこで冷却系があって、停止中も冷却しているんです。

普通はそのバックアップでディーゼル発電機があるんですが」

「なんか電源車を呼んだってニュースが」

「米軍からも応援してもらったって」

「でも熱が下がらないって」

「どれぐらいの熱なんだろ」

「まさか、炉心が溶ける？」

「そんな！ 重大事故！？」

みんなが口々に言い出したそのときだった。

「おまえたち、にわか原発マニアやってどうするんだ。

おまえたちが運転するのは、まず原子炉じゃなくて電車だろ」

梅沢の声が静かに響いて、皆黙った。

「とりあえずおまえたちは炉の冷却より頭の冷却だ。

それと、飯食ってこい。みんなろくに飯食べてないのもいるだろう」

「でも始発電車は」

「それは追って知らせる」

梅沢はそう言って、電力区のデスクに歩いて行った。

普段厳しい梅沢の顔が、さらに厳しかった。

みな、目を見合わせて黙った。

その間、電話の音が響いた。

「え、母さん？ いや、連絡が取れないんだ。父さんも。

浩二は平気か？ 今避難している？ 家は？

そうか。まず、おまえの無事だけでもいいよ。本当に」

彼は、実家が三陸の海岸だった。

ほかにも家族と連絡を取っている運転士がいる。

「おい、携帯は今使っても発信規制があるかもしれん。

表の公衆電話のほうが確実だぞ」

「でもあちは行列がすごくて」

再び、空気が重く沈んだ。

詰所での朝食

「おはようございます」

「おはよう。昨日の今日だ、眠れたか」

「私、寝るのは得意なんです。ドラえもん『のび太』かって言うぐらい、すっと一んって眠れるんです」

しかし目の下にくまができています。

「ご苦労様です」

皆が声をかけると、そこには電力区のチームが詰め所に入ってきていた。

「だいぶ疲れたろうに」

「疲れてないさ。まだまだやるよ、俺たち。

な！」

チームの皆が「おう！」言う。

「これぐらいでへこたれないさ。俺たちが電気やらずに誰がやるってんだちくしょう」

「おい、大丈夫か」

「大丈夫だ。大丈夫なんだよ」

その言葉に、古参の助役がとがめた。

「おまえら、とりあえず飯食え。飯食わないとイライラするぞ」

食事当番が食事を持ってきた。

「はい、お食事で一す」

「すみません」

「まず、飯食え。腹が減っては戦はできぬ。今回の地震は、実質的には戦いだからな。

それも長い戦いだ。それがこの時間でこのざまじゃ、先が危うい」

チームが皆、うなずいた。

「今朝の食事は私の作ったおろしハンバーグで一す」

そのとき駅員の一人が言った。

「千香ちゃんのハンバーグ食べたあとおなか緩くなる気がするんだけど」

「えっ」

「おい、それ本当か！」

みなびっくりした。

こういう職場での食中毒は大変なことになることは皆知っている。

「それは先輩が乳糖不耐なのに、それ忘れて牛乳飲むからですよ」

皆、笑った。

「なんで？ わかってて飲むの？」

「いや、おいしくてつい。不耐なんですけど」

「おなかごろごろしても？ それなんてプレイだよ」

「つか夜明けまで変態トークは勘弁しようや」

みなに笑顔が戻った。

それぞれに思いはあるのだが、それでも笑った。

そしてハンバーグをぱくつく。

「冷静になると、朝ご飯がハンバーグとか、パンチ重いよな」

「でもありがたいよ。何日分かまとめて働いた感じだから」

「そうだな。いつになく働いた」

皆がうまいとほめながら食べているそこに、もう一人の助役がきた。

「始発電車からうちの電車、ぜんぶ運休だって」

皆びっくりした。

「ええっ！ そんな！」

「誰がそんなことを」

「輸送指令からの正式な通告です。梅沢さんと運用部が決定し、社長の承認を受けたそうです」

「でも大丈夫か？ みんな始発電車待ってるぞ」

「とはいえ」

助役が言った。

「この詰め所で喧嘩フィーバーのリーチ状態で、安全な運転なんかできないだろ」

皆、また押し黙った。

「本当ですか！」

樋田社長は広報部長の言葉にうなずいた。

「全線本日運休を決めた。安全確保のためだ」

「でも、他社線が復活します。我が社だけ運休なんて」

「いや、大丈夫だ」

「そんな、大混乱が起きますよ」

「いいんだ」

「我が社の信用を」

「じゃあ、社長として命令するけど、いいか」

樋田は落ち着いていたが、それがかえって軍隊の恐ろしい将校のような凄みがあった。

そういえば、この社長はかつてハゲタカファンドの乗っ取り屋として、冷血な乗っ取りをしてきたのだ。

それが乗っ取ったこの北急で、すっかり変わったのだ。

仕事が趣味のビジネスマンが、鉄道趣味にはまり、その鉄道を仕事とする鉄道マンに。

「わかりました。広報部として努力します」

「そうだ。気合い入れてやれば、絶対になんとかなる。ギャンブルだが、俺はそういう局面に何度も勝ってきたんだ」

部長はうなずいた。

「ええ。やりましょう」

そして、夜が明けた。

「首都圏のこの朝現在の鉄道の運行状況です。北急線は始発より全列車運休を発表しています。ほか、JR山手線・中央線は現在点検中で、運転再開は未定、ほかJR東海道線…」

朝のニュースで北急の運休が発表された。

さっそく、北急コールセンターには電話が集中した。

「大変恐れ入りますが、設備の再点検と安全確保のため運休とさせて」

コールセンターでは統括席の前に並んだブースでサポート係が電話で罵声を浴び続けている。

そして統括の前にサインが出る。

「お電話お待たせしました。私北急広報部統括の鐘淵と申します。大変恐れ入りますが」

その間にもサインが出る。

こうして役割を分担し、苦情電話に対応している。

「すまないな」

樋田社長がねぎらう。

「はい、はい、そのご意見、まことにごもっともでございます」

と答えながら、係たちは皆、決意した顔でうなずいていた。

その傍ら、三陸の土地が津波に押し流されていくヘリコプターからの画像がテレビで流されている。

そして、その画像に、津波がくるとも知らず走っている車がうつる。

気づいたのか、その車列はちりぢりになって、畑に突っ込んででも逃げようとする。

しかし、それを津波が容赦なく飲み込んで行く。

あの一台一台に、命がある。

それが、本当に潰える瞬間の映像。

テレビや映画でそうなる画像は、所詮架空だし、命も乗っていないCGや模型だ。

しかし、この映像には、その命が本当にいて、潰えているのだ。

その凄惨さに、全員、一瞬目を背けた。

「社長が猶予をくれた！

今、コールセンターと案内コーナーは戦場だ！

その連中が食い止めてくれている。俺たちはその間に休息をとる！」

乗務員が集まっているなか、梅沢が叫ぶ。

「いいんですか」

「まあ、ぶっちゃけ、ギャンブルだ。

他社線が動き出せば、事情を知らないお客さんが駅の乗り換え口で混乱する。

だが、他社線も、一部停電もある。復旧の見込みを発表できない同業もいる。

社長の賭けだ。すでに社長は国交省に呼び出しを受けている。

俺たちは、みんなが食い止めている間、しっかり休んで、そのあと設備点検を行い、明日始発から運転を再開する。

潜水艦乗りは、睡眠も給料のうちという。

これは俺達への、社長からの特大の臨時ボーナスだ。

おまえたちは、風呂に入り、しっかり睡眠するんだ。

点検再開は16時と通告があった。

わかったな！」

梅沢が檄を飛ばす。

「はい！」

「日頃と違うが、いずれ普通の運転にもどっていく。

これまでと同じ日常の移動を、お客さんに提供する。

それが俺たちの仕事だ。

北急がただの鉄道じゃないところを見せてやろう！」

「はい！」

北急・新宿駅の駅案内所のアクリルブースの中に、駅員の板本ミナがいた。

「おい！　なんでおまえのこの列車は動かないんだ！」

「大変恐れ入ります。ご不便をおかけしてすみません。現在私たち北急電鉄は地震の後の再点検を行っております」

「でもなんで一日中なんだよ！」

「申し訳ございません。ここまでご足労をおかけして、大変申し訳ないと思っております。我が北急の総員にかえて、深くお詫び申し上げます」

それを、隣の滝川香乃がちらりと見た。

かつてクールでスマート、といいながら、実際ぶっきらぼうになりかけだった彼女が、ちゃんとお詫びを言っている。

香乃は駅務から北急の誇る超豪華クルーズ列車ブラウンコーストエクスプレスのパーサーだったが、彼女から見ても、ミナは十分なホスピタリティを発揮していた。

本当の意味での創意工夫。ミナもまた、それに目覚めたプロなのだ。

それが香乃にはうれしかった。

「おい！」

香乃もまたお客様に呼ばれた。

「恐れ入ります」

香乃もまた、対応を始めた。

フラグ

「しかし、俺たち現業の連中が全員集まるなんて、これまであり得なかったな」

仮泊所の満員の風呂で、一人が言った。

鉄道の詰め所には風呂があることが多い。屋外で働く鉄道員には当たり前に必要なのが、風呂だ。

「普段交代勤務が休みなく入り組んでいるからな」

「あ、そうか、だからこんなに仮泊所の風呂が狭いんだ」

「あじゃないよ。普通に気づこうよ、それ」

みんな笑った。

笑える状態でないことは全員が承知していた。

多くの家族が、被災地にもいる。

それは北急沿線に住む者も、同じだ。

いまずぐにでもそばに行つてやりたい。

今すぐ、無事を確かめたい。

だが、それができない。

それが鉄道員だ。

「緊急地震速報！ 緊急地震速報！」

全員が天井を見上げる。

「もうなんか、揺れにも慣れましたね」

「電車の揺れよりは小さいしね」

「いくらなんでも、それとはちがうだろ」

また笑った。

「そうだ、これ上がったら、集合写真撮らないか？ こんなこと現役じゃ絶対ないからさ」

「それは不謹慎！」

「というより死亡フラグ何たててるんだよ」

「びんびんにフラグが立っちゃったじゃないか！」

また笑いが起きた。

「しかし、これで社長に大きな借りができた。

あの人のこと、俺たちは、絶対にもり立てて、北急を、お客さんの足として、守ろう！」

みな、うなずいた。

「検車区、電力部、施設部、再点検と再整備に入りました。

運転区、車掌区でもそれぞれ全員が運転再開準備ができました」

樋田社長が報告を受ける。

「たっぷり怒られてきた。くそ、まだ頭に響いて痛い」

「鎮痛剤をお持ちしましょうか」

秘書が言う。

「ああ。頼む。まったく、天地に鳴り響くティンパニかシンバルか、という感じだったよ」

「ご苦労様です」

「で、他社線は」

「少しずつ回復していますが、運行本数はわずかです。

十分案内要員で対応できています」

「皮肉なもんだ。よその鉄道の復旧が大変な方に賭けるとは、なんて罪だ。

俺は間違いなく地獄行きだな」

「いえ」

秘書は言った。

「そうになったら、私たち北急の全員がお供して、みんな一緒に、また地獄でお客さんに愛される鉄道を走らせましょう」

樋田は笑った。

「そのときは頼むよ。やれやれ」

その直後、樋田は目をぎらりと光らせた。

「俺をここまで追い詰めやがって。地震の野郎、絶対許さん。今度またくるときまでに、絶対に負けない鉄道にしてやる」

秘書が、深くうなずいた。

2日目、少しずつ鉄道が回復し始めたが、すぐに夜となった。

もうひとつの戦線

だが、深夜は深夜で、さらに問題が起きた。

東京電力の福島第1原子力発電所の危機が拡大したうえに、火力発電所も被害を受け、送電力が大きく落ち込んでいた。

「はい、北急電力部」

電力部の係が目を合わせた。

「輪番停電？ 電気がこない？ そんな、それじゃうちは運転できないじゃないですか！」

テレビで、経済評論家だった経産相が、輪番停電の発表をしていた。

「首都圏を5つのグループに分けて、そのグループについて、3時間の計画停電を順番に行います」

「なんてこった、これじゃ現業のみんなが復旧しても、全然ダメじゃないか！」

電力部長がすぐに電話を取った。

「北急電鉄です。事業電力部の綾部さんをお願いします」

運転区にもその知らせはすぐに伝わった。

全員が不安を隠せなかった。

奇策の自主運休も、地震の災禍は、それを上回って人々を追い詰める。

「畜生、そういう方向から来たか」

樋田は重役フロアのロビーで神宿の夜を見ながら、火を吐くドラゴンになりそうな顔になっていた。

「でも絶対に、俺たちは屈服しないぞ。」

どうなっても。

畜生」

<続く 11年3月20日ここまで>

「電気の供給についてはやはり不安定で予断を許さない、というわけですね」

北急電力部長が東電事業用電力部の担当と、東電本社の応接室で話をしている。

「ええ」

「でもせめて、最低限のコアタイムだけでも電気をいただけると」

「そのお気持ち、よくわかります。しかし電力需要の変化が現在刻々と変化してます。我々も確約はどうにも」

「我々もお客様に確かなことが何も言えず、昨日は一日全線運休にしました。

お客様と国交省のご批判を受けております。そこで」

「我々もご存じの通り、福島原発での事態に対応中です」

「そこはお察ししますが」

「そういえば私どもが把握していないのですが、北急さんは自前の発電設備、最近お作りになりましたよね」

「ええ。半原駅の新駅舎は風力と太陽電池による自主給電設備を用意しています」

「そしてエコトレインも」

「はい。グリーン購入した電力も特急列車の運転に使いました。

ほかにも回生制動をすべての車両で可能にする計画も」

「省エネ、ですよ」

東電の担当の顔が険しくなる。

「でも、ほとんどの電力は我々が供給してますね。

特に複数線化が進んでからの電車の増発も大きかった。

結局ご利用電力は増えましたが、それでも我々は何も申し上げず、黙々とただ」

「あの、ちょっと、おっしゃることがちょっとずれて」

それでようやく担当が我に返った。

「すみません！」

担当は謝った。

「でも、私たちのこの言いようのないこの気持ち、何となくご理解いただけないかと」

電力部長はうなずいた。

「そうですね。省エネと言いながら結局電気の大食らいであったのは、紛れもない事実です。

エコとかグリーン電力といっても、それはあくまでも東電さんの圧倒的な供給力のほんの一部でしかない。

私たちも、今起きている福島などの方々にご迷惑をおかけしている後ろめたさがあります。

その免罪符を求める気持ちが、心のどこかにあったと思います。

しかし、我々も正面からこの問題、エネルギー問題に取り組むことを、避けていた。

電力マンとしての後悔は私も持っています」

電力部長はそう言い、頭を下げた。

「一部ではあなたたちを営利企業と批判する勢力もいます。

でも、私たちはあなたたちを信じます。あなたたちの苦しみも受け止めましょう」
担当は、かすかに涙していた。

「実は私の実家が大船渡で」

北急電力部長と部長付は、そのとき、彼がなぜこうなっているのか、はっとわかった。

「安否不明です。それでもあなた方大口事業者さんがいらっしゃって、電気を奪い合う。

そんな中、時々私は何のためにこの仕事をやっているのか、素にかえってしまう。そしてその瞬間、こんなにやっても、なぜ、と。

すみません、自分に余裕がないんですね」

「お察ししても仕切れません。本当に。

でも、電力マンとしての気持ちは、これまでも、これからも共有します。

普通が当たり前で、よくやってもほめられない。そして一生批判しか言われない。

その電力マンとしての覚悟は、同じくあります。

ですから、ここはこれで」

担当が目を見開いた。

「施設の復旧をよろしくお願いします。

計画停電の予定だけ、確実にお知らせください。

それで十分です。

我々は、そのなかでやりくりします」

「いいんですか。お困りになると」

「大丈夫です。計画さえいただければ、我々はそれにのっとった電力利用計画を立て、ダイヤに反映します」

「そんな困難を」

電力部長は、ほほえんだ。

「いいですよ。大事なことですが、我々は、プロですから。

与えられた中でのやりくりもせず、くれくれと言うだけなら子供にもできる。

プロの仕事をやりましょう」

担当は「大変恐れ入ります」と頭を下げた。

「でも、計画停電の計画、迅速にご連絡を」

「わかりました。我々も全力で連絡と、電力の回復にあたります！」

「部長、いいんですか。こんなことで決めて」

帰りに東電の応接室から降りる非常階段を踏みながら、部長付の若い電力係が言う。

「いいさ。さあ、社長にたっぷりしかられよう。

コールセンターにも迷惑をかけるだろう。

でもうち、北急は、それでも耐えられるさ。

具体的でない危機には対処不能だが、具体化すれば、あとは手を考え、対処すれば良いだけだ

。

減便運転を強いられるが、全く電気が3時間以上つかない人々もいるんだ。

こんなとき、自分たちだけには、なんていえるか？

お客さんをお乗せしても、お客さんは家が停電なんだぞ。

それに計画停電とはいえ、これが計画給電になるよりはずっといい。

21時間は電気があるんだ。

腕の見せ所だ。さあ、やってやろう。

俺たち北急電力部の力で」

そのとき、また緊急地震速報が入った。

「もう神経参りそうですね」

「ああ。でもみんなそうだから、心配するな」

運転再開と、とある旅立ち

それでも、北急電鉄は、運転再開に漕ぎ着けた。

30%程度の本数で、しかも徐行運転で、その上区間を限った復旧だった。

当然、コールセンターでの戦いは、さらに凄惨になっていた。

着信した問い合わせの累積が始まった。

コールセンターのみなが、すぐに対応できない自分を責めながら、苦情に頭をさげつづけた。

電話の向こうに届かないと思っても、どうしても頭が下がったのだ。

運転が再開された本厚戯駅の案内所に、旅支度をした初老の男性がやってきた。

「あの、ここから新宿まで、電車の運転ありますか？ 新宿まで行くんですが」

「運転はございますよ。少々お時間がかかりますが。申し訳ないです」

「じゃ、切符をお願いします。領収書お願いできますか」

「かしこまりました。恐れ入りますが、お名前は」

「では、松芝電気システム社原子力事業部をお願いします」

その名に、駅員皆が顔を一瞬見合わせた。

原発に行くのだ。

「お先上がります。お疲れさまでした」

一人の私服に着替えの済んだ明け番の駅員がそう言うと、その旅の男性に声をかけた。

「私も新宿の北急の自分の寮に帰るところなんですよ。ご一緒してもいいでしょうか」

彼はいいですよ、と快諾した。

「本日北急線は運転区間すべてで徐行運転を行っております。お急ぎのお客様には、ご不便と遅れを深くお詫びいたします」

車掌アナウンスが流れる。自動放送装置のついた新車だが、車掌は肉声で言葉を添える。

「電力マンとして、エンジニアとして、心からすまないです。本当に」

彼は話した。

「実は、あの例の福島原発の最後の改修に携わったんです。

それで、呼集がかかって。

でも、呼集がなくても行くつもりでした。

私にも、責任がある」

彼は続けた。

「でも、あの炉、我々はあの子と呼びますが、本当にあの子には無理をさせました。

生まれが祝福された日本の原子力技術が、今、終わるかもしれません。

東海村の初めての原子炉ができたとき、原子の火が点った、地上の太陽ができた、と皆喜びました。

先の大戦で疲弊し、電力不足で立ち直ろうとしても足を引っ張られる日本にとって、原子力は夢の技術でした。

まさに地上の太陽だったんです。ウラン1グラムは石炭2.2トン、石油1.3トンに匹敵します。皆の期待を受けて、原子力工学への投資が進み、炉の改良も進みます。日本でも原子力船〈むつ〉が進水し、まさに原子力の時代が始まります。

しかし当時は冷戦のなかです。核戦争のための核実験も、今では信じられないようなひどい状態で行われました。そのなかで、放射線や放射能被害をうけた被曝者の問題が生まれます。

日本は被爆国です。ですから日本には広島と長崎に赤十字社原爆病院があります。そのなかで核の被害の研究も進んでいます。

そしてマグロ漁船第五福竜丸がアメリカの核実験の「死の灰」を浴び、多くの被曝者が生まれました。彼らの被害もあり、日本では放射能への恐怖が広がります。

原子力船〈むつ〉の放射能漏れでは、事故の発表が遅れて、その恐怖に原子力への不信感が繋がってしまいました。

そこからはもう、悪くなる一方です。どんなに我々が安全な炉を目指して努力しても、技術が進んでも、人間の、人間関係のミスですべてが台無しです。地震などで安全に炉を停止させても、連絡が遅れた、との苦情が来ます。それがなんどもです。

我々工学の人間の説明も悪かったと思います。確率論での話をして、確率は低くても当たる人間がいる宝くじの論理を持ち込まれれば相殺されます。当然です。

必要なのは、信頼の回復しかないんです。そして、人間のミスを最小限にするためには、人間が常に間違える可能性を考え、自動的に安全になる技術と、間違えにくい技術を作るしかない。

私たちはそのために研究開発を進め、また運転員も錬成を続けてきました。

でも、政治もマスコミもそういう地道な努力を評価することはありません。

無謬主義と不信のあいだに何があるのでしょうか。それはタブーです。

そして原発関係者への中傷や風評被害が常に存在しました。

我々は安全を目指し、電力不足を回避することを目指しました。

いつのまにか停電も珍しくなりました。でもだれもそれを評価しません。電気は当たり前のものになりましたが、それを誰も褒めてはくれませんでした。

そしてスリーマイル事故、チェルノブイリ事故で、不信感はますます高まりました。

それでも日本のみんなのため、炉を作るしかありません。水力は美しい峡谷と村や町をを沈め、火力は排ガスを出します。無害なガスしか出さないように工夫しますが、それでも足りません。第一、電池のように「電力」を貯める技術は全くないのです。苦肉の策でダムを二つ使って水の位置エネルギーに電力を貯める揚水発電を作りましたが、それも芳しくありません。

グリーン電力も生まれました。家で発電できるようにもなりました。太陽電池、風力発電、地熱発電。しかし現在の産業では、電気の「質」まで問われます。

風力は突風が吹けば故障します。風力発電に適した穏やかな風が吹き続けて、発電に使える場

所は日本には現状、ほとんどないのです。

地熱発電も、深い井戸を掘るコスト、温泉を枯れさせるリスクもあり、適した土地を見つけてもそれが国立公園に近いかそのなかで、国立公園法の制限で建設できないケースも多い。

太陽電池は天候にも立地条件にも左右され、パネルの温度による効率低下もあり、そしてその電池は永遠には使えない上に、その寿命後の廃棄のことはまだほとんど考えられていません。

結局、安定供給するには原子力しかない。だから、私も含めて、信じていないくせに原発の電力に頼ることになります。

そして、その不信感で、原発は迷惑施設と呼ばれ、どこにもつくりようがなくなります。

そのうえ、つくってきた炉の寿命も迫り、廃炉の検討とその技術開発が進みますが、しかしそれも多くの人が真剣に、切実に考えません。

核エネルギーサイクルも高速増殖炉は我々の現状の技術がまだまだ不足ですし、燃料の再処理で使った核廃棄物の処理も出来ません。

そんなどんづまりで、あの子、福島の子、福島の炉たちを更新します。一箇所に集中させるなどと言っても、他のところは迷惑施設と拒否します。

1967年に着工した1号機は、71年に運転を開始しました。実に40年も働きました。

もう十分働いたんです。廃炉としてリタイアさせ、別に新しくてもっと安全で出力も高い炉を作るべきことは分かっていたんです。

でも、それはできません。大きな反発を受けるからです。たった46万キロワットの炉を、なんども改良して使い続けていたんです。

あそこには、7号・8号機を計画中でした。改良型沸騰水型、出力は1機で138万キロワット。実に3倍の出力で、インターナルポンプや非常用炉心冷却装置を使い、またさまざまなデジタル技術による改善をします。運転用の機器も最新で、ミスをしにくく、炉内の状況把握が容易に改良してあり、同型の炉は既に柏崎刈羽、浜岡、志賀にはすでにそれが稼働中です。

でも、その古い炉を、使い続けました。廃炉にすることが法的にも政治的にも無理だからです。

それを受け入れてくれたあの原発地域の人々は、原発で発電した電力を使えないのです。

東京と首都圏のために、彼らはこらえてくれていたのです」

彼は熱く話した。

「その彼らを危険にさらすかもしれない。本当に悔しいです。地震に耐え、津波に洗われても耐え、停止しても、それでも問題が起きました。

率直に申し訳ない。本当にそう思います。

誤っても謝りきれません。

この事故は、ぜったいに収めます」

駅員は、そう胸を打たれた後、言った。

「どうかご無事で」

すると彼は笑った。

「なんですか。無事に帰ってきますよ。当然です。

あの子のことは私もよく知っています。

ほかにも熟知したプロがあつまります。

そして、ちゃんとあの災禍の中、炉を止めた若い運転員たちも、プロです。

まだ現時点ではわからない不確定要素はあります。

でも、それを一つ一つ確定していけば、自ずと対策の方針が定まります。

想定外のことは、別に原発に限ったことではない。

人間はもともと、想定外のことと、戦う宿命を持っているんです。

ちゃんとあの子を、しっかり落ち着けて、帰ってきますよ。

プロとして、きっちり後始末までして」

「東京は大丈夫ですよね」

「ええ。私が知っている範囲内でも、十分無事です。想定外のことがさらに起きれば、想定外になるでしょう。でも、ほとんどは想定内です」

その時、電車の中で新聞を読んでいる人がいた。

そこには放射能と大きな見出しが書かれている。

「放射線と放射能と放射性物質のちがいをきちんと説明しないマスコミ。

『ミリ・マイクロシーベルト毎時』の意味も知らせない。

放射線を浴び続けると、人間の体に悪影響が出ます。

しかし、それは『続けると』、です。

だから、『一時間あたりの量』の尺度で言うんです。

そして、その量で計算し、センサーとタイマーをつけて原子力の作業をし、量を越える前に我々は作業を交代し、退避します。

そうすることで、放射線の影響は、人間の体の力で自然に回復できるんです。

それは広島と長崎で日本人がうけた被害の調査でも明らかです。

CTスキャンと比べて、などといいますが、被曝の害を、毎時シーベルトの1時間というと、CTスキャンに1時間入り続けるのと同じことなんです。

別にあの事故現場や炉心で寝泊まりするわけじゃないんですよ。

炉も冷却しなくちゃいけません、頭の冷却も必要です」

彼は微笑んだ。

「内部被曝と言っても、我々はマスクもつけ、防護衣も着て作業します。

本当に小さな塵でも、放射性物質は放射線を出します。

しかし、その塵に東京が負けるのなら、なぜあのダダ漏れに死の灰を降らせた原爆実験を行っても、東京の人々は無事だったのか。

広島と長崎などは直撃です。それでも人は住んでいて、樹も生え、実を結び、子どもが生まれています。内部被曝と生体濃縮があるのなら、彼らは何故今生きているのでしょうか。

広島のおいしいお好み焼きを作っているあの平和は、どうして訪れたのでしょうか。

むしろ、そういう常識の歪みの被害のほうがよほど深刻です。

でも広島の人たちと、日本の他の地域の人達は、普通に結婚しています。子供も生んでいます

。

常識の出番です。自然界にも放射線や放射能はあります。人類はそれに屈しない力を、自らの体の中に既に持っているんです。

そして、自然界はもっと強いそれを持っています。

ある意味、生体濃縮でさえ、自然が遺伝子的アルゴリズムで獲得した浄化の仕組みかもしれないんですから」

彼がそういうころ、電車が新宿が近づいたというアナウンスが聞こえた。

彼を駅員は見送ることにした。

「なんか死亡フラグたてられちゃうなあ」と彼は笑っていた。

「普通に帰ってきますよ。普通に仕事して。それだけです」

そして、東電の迎いのバスがいた。

「じゃあ、帰りは」

駅員は名刺を渡した。

「帰ってくるとき、ここにご連絡を。」

お仕事のお帰りのロマンスカー、一番いい席をおとりしますから」

彼は「前展望がいいですね。後ろ展望は酔っちゃいますから」と笑った。

「当然、前展望-1のお席を用意します」

彼は笑った。

そして、彼を載せて、バスは出発していった。

駅員は、それを見送った。

そしていつもの癖で、確認の視差喚呼をできてしまっていた。

夜、再び

計画停電が始まるが、東京23区内は一部をのぞいて停電を回避することとなった。
しかし、その外では停電する地域があった。

夜がまたやってきた。
街をゆく皆が、一様に疲れた表情をしていた。

その時、突然ギターを取り出し、歌い出す男達がいた。
その演奏に、みな驚き、そして馴染んだメロディーに、みな顔を緩めた。

さよならは言っちゃいけない　また絶対あえるから
僕らは皆　この街で戦う仲間
君がたとえいなくなっても　僕らは守り続ける　この街を
またあおう　きっと会える
僕らは同じ　ひとつの道の上にいる

去年のMHK紅白歌合戦に出演したバンド、「トレンチタウン」だったのだ。

演奏が終わり、一斉に拍手が湧いた。
ゲリラライブの通報で様子を見に駆けつけた警官ですら、拍手していた。

避難所から悲鳴のような救助要請が殺到しているさなかだった。

何もかも足りない避難所で、寒さと空腹と不安の中、みな必死なのが、電話でもネットでも拡散していた。

そんな中。訓練をきり上げた米原子力空母ロナルド・レーガン以下の打撃群が、「オペレーション・ともだち」という作戦名で活動し、また三沢基地の米軍も救援に参加した。

世界各国からもお見舞いのメッセージと、救助隊と、支援物資がやってきて、本格的な救助の段階が進んでいた。

また、自衛隊も保有するヘリ空母「ひゅうが」を、ドック入りをキャンセルさせて、救援を始めていた。

空母は空港としての機能を持ち、ひとつの独立した都市なみのリソースを持つ。

それが、物資満載の45000トンの補給艦をつれて、全力で、被災地のすぐ沖に驀進し、そ

こからヘリが次々と飛び立っていく。

その上空には米軍輸送コマンドの輸送機が、夜明けとともに、被害を受けた空港へ強行着陸すべく待機している。

海辺の空港も津波に現れ被害を受けた。自衛隊の航空基地も、高価なF-2戦闘機ごと一時水没し、瓦礫が滑走路に散っていて通常では着陸できない。

しかし、輸送機のパイロットは、それでも物資を下ろす訓練を受けている。戦争だったら当然その技量がなくては勝てない。

勝つための準備を十分に作る、単なる美談ではなく、十分な物量に基づいた作戦で一挙に形成を固める、それが米軍の伝統だ。

自衛隊もそれに学んだが、いかんせん予算規模も基地も小さい。

故に、米軍との協力は揺るがしてはならないのだ。それを自衛官はよく知っている。

そして、自衛隊と米軍の連携のための作業も、すでに済んでいる。訓練してきたことが、今発揮される。

空母から出発した米軍の大型ヘリコプターの中では、乗っている米海兵隊の兵士たちを軍曹が煽っていた。

「これから海岸に上陸するぞ、野郎ども！」

「イエーイ！」

兵士たちが声を上げる。

「そびえ立つ瓦礫の山が俺たちを待ってるぜ！」

「イエーイ！」

「その下で助けを待っている日本人たちを助けるぜ！」

「イエーイ！」

「さらにいいニュースだ！」

原子炉がやられた。最悪の場合、チェルノブイリなみの放射能地獄かもしれないぞ！」

「イエーイ！」

「ヒッター！ これでたっぷり放射線で肌をこんがり焼いてナイスガイになって帰れるぜ！」

「イエーイ！」

「でも俺達の先輩と大昔に戦った旧軍、サムライとニンジャの末裔・自衛隊のやつらは、原子炉の影響は全然平気って笑って行ってやがるぜ！」

「イエーイ！」

「なんてこった！ あいつら、自衛隊の連中には訓練では勝ったり負けたりだったぜ！」

「イエーイ！」

「でも今回は、俺達の隠していた本気をばっちり見せてやるぜ！」

「イエーイ！」

「自衛隊もションベン漏らすような大活躍で救助してやるぜ！」

「イエーイ！」

「野郎ども、今回は殺しに行くんじゃないぜ！ 助けるんだぜ！

　　ハッハー！　なんてこった！　お前らなんと、みんな天国行きだ！」

「イエーイ！」

操縦席では、だから海兵隊員は、という顔でパイロットが苦笑している。

「まもなく着陸する。馬鹿なおしゃべりはこれまでだ」

パイロットがインカムで知らせると、兵士たちがヘリの轟音に負けないほどの、ひときわ大きな声で、さげんだ。

「イエーイ！　先輩たちの出来なかった本土上陸だぜ！」

「ハッハー！　一人残らず助けてやるぜ！　待ってろ、三陸海岸！」

そして、陸が見えてきた。

津波に徹底的に傷めつけられた海岸と、その高台の避難所が。

「社長、お電話です。海外から」

秘書が知らせる。

「こっちで取る」

樋田社長は急いで社長室に入り、電話に出て、英語で話す。

「我々の意思はゆるぎません。

皮肉な後ろ暗い賭けにも勝ちました。運命の神は味方になりつつあります。

でもまだ、この不利なゲームは続いています。

はい、たしかに形勢は未だ不利です。

はい、そのとおりです。

そこで、ぜひあのお方に。

いえ、それが難しいことは承知しております。

でも、だからこそそのお願いなんです。

あのお方も、日本市場を無視できないと思います。

我々の、あの計画を、今こそ実施する時です」

その眼をぎらつかせる樋田社長の手元には、「ネクスアース計画」という極秘の企画書があった。

出発

夜明け頃、北急の基地を、電車が次々と出発していく。

「昨日は40%、今日は60%の運転密度だ。

日々着実に我々北急は回復している。

しかし、まだ震災は救助と避難の段階だ。

避難所では、物資欠乏で苦しくなっている。

我々に何ができるか、考えなきゃな」

「ええ」

助役と来嶋はそんな話をした。

「じゃ、出発点呼を」

「はい」

「運転士来島、体調良好です。今日の仕業行路はZ37Aです。

本日の留意目標は、緊急地震速報時の停止操作手順の確認、混雑時のホーム警戒です。

時刻整正します。5時58分、0秒！」

「整正よし」

「では、出発します」

「甲組の来島君だ、今更言うことは何も無いな」

「いいえ、まだまだ修業中です。まだ自分の運転に迷いがあります」

「まあ、向上心もほどほどにな」

「承知！」

来嶋はさっと敬礼すると、笑顔で列車に向かっていった。

来島は、運転に集中しながら、思った。

運転できないあの被災後1日目。

あの時の悔しさ、無力さ。

運転できない運転士は、ただの野郎でしかない。

本当にそうだなと思い知らされた。

そして、運転できる栄誉を、改めて感じるのだった。

次第に乗客が増えてきた。

首都圏経済が、少しずつよみがえるのだろう。

そして駅を進むごとに、混雑がひどくなった。

「やばいな」

運転士の来嶋もわかるほどの混雑だった。

軽量に作られた最近の列車は、同時に混雑時にブレーキを自動的に強くする応荷重ブレーキ機能を持っている。

その効き方を、来嶋はすべての感覚を総動員し、ドライブフィールとして鋭敏に捉える。

応荷重ブレーキなどを働かせるコンピュータとの、対話のような運転だ。

この領域が、北急運転甲組のゾーンだ。

それが、混雑を捉える。

「新飯の台、停車！」

モニタ装置が停車駅を通知する寸前に喚呼する。

そしてマスコンを動かし、ブレーキをぐっとかける。

いい子だ、重いだろうが、しっかりな。

そういたわるように、ブレーキを維持する。

制動力が正常に働いている。

あとはブレーキを階段状に緩めていく。

そして、停止位置にすいこまれるように停める。ブレーキは停止位置には0ノッチ、ノーブレーキで惰性の途切れるそのとき停止位置に届くようにする。

そして、止まったところでブレーキを強めて、停止を保持する。

一段制動階段払いと呼ばれる、基礎的な止め方だ。

パイロットランプが消えて、ドアが開いたことを示す。

時刻を見て、来嶋はホーム側の運転室窓を開けた。

昔の複々線が出来る前の北急のようなラッシュだ。

しかも、人々の顔が厳しい。

よくない。

その時だった。

「お客さまにお願いがございます。

本日電力不足対策のための運転本数削減を行っております。

大変混雑して申し訳ございません。

当列車、ただいま空調と換気装置を調整しておりますが、お暑いとお感じの方、空気を入れ替えたいたかた、窓のノブを摘むと窓の上側が内側に倒れて外気が入ります。

ぜひ外気を入れてリフレッシュをお願いします」

乗客たちが窓をあけている。

いいぞ、と来嶋は思う。

そして運転席に戻る。

「ドア閉まります」

ドアが閉まって、パイロットランプが点灯、そして車掌からの発車合図のブザーがなる。

「新飯の台、出発、進行！」

その前に開けた窓から、風が入ってきた。

温かい風だった。

そういえば、春に近付いているんだったな。

ここ数日のことがあまりにも重くて、物事の時間の流れ方が頭の中でおかしくなっている。

冷却冷却。

そう思いながら、来嶋はマスコンを力行1にいれ、そしてうごきだしてから力行5まで引いた。

いいぞ。

こうして来嶋は、電車と対話しながら、正確な運転操作をしていく。

しかし、輪番給電が、計画給電として行われた。

救難活動は本格化した。

そして、その夜も、被災地では、寒い避難所での生活に多くの人々がこらえていた。

夜、孤独な居酒屋で

「おい、来嶋、幡野、飲み行くぞ」

運転区で、二人に、超ベテランの指導運転士の梅沢が声をかけた。

「えっ、この被災直後に飲むんですか」

「だからこそだ。今、飲食業がとても困っている。

俺がおごるから、『銀河』に飲みいこう」

「ただ酒ですか、そりゃ嬉しいですけど、こんな時に」

「自粛なんかする必要はない。働いた後のビールぐらい、普通に飲もうや」

居酒屋『銀河』は、周りが真っ暗な夜の中、赤ちょうちんを灯らせて営業していた。

赤ちょうちんともう一つ目立つのが、かつての寝台急行『銀河』の輝くテールサインの店である。

「おう、大将、絶好調に暇そうだな。邪魔しに来たぞ」

「梅沢さん！ いらっしやいませ！」

『銀河』は鉄道カフェや鉄道居酒屋が流行る前から、鉄道模型や鉄道写真を飾っている居酒屋で、その常連は北急の人間が多い。

しかし、いまは梅沢たちのほかは全く客がいない。

「じゃあ、とりあえず生中を」

「はいな！」

3人は座敷に座った。

「本当におごりですね」

梅沢は笑った。

「ああ。じゃんじゃんやってくれ」

来嶋は肯き、言った。

「じゃあ、じゃんじゃん行かせていただきます」

「おい、幡野！ このコップの上が上野で、下が札幌だ。

北斗星1号いってみよう！」

「はい、運転士幡野承知！ 全区間フルノッチで行かせていただきます！」

そうバカバカしくやって酒を呑む。

これではまるで学生の飲み方だ。

「つまみも美味しいですね」

「俺達の馴染みだからな。さあ、もっと飲んで食え」

「はい、よろこんで！」

それに頷く梅沢は目がすわっている。

「ちくしょう」

梅沢は小さくいった。

「何が自粛だ、なにが計画停電だ。

何が『犠牲になった方々と避難中の方々の気持ちを考えろ』だ。

俺達の気持ちもすこしは考えようや、なあ新聞屋どもよ」

来嶋と幡野は目を見合わせた。

「ほんと、こんな状態じゃ、復興なんか出来ねえ。

無理だ。

暗いニュースや自粛ムード、買いすぎとか風評被害とか、おまえたち新聞が全部混乱を拡大してるじゃないか、ちくしょう。

日本人が慎み、忍耐強い？

当たり前だ、馬鹿な喧嘩はみんな嫌いだからな。

だがな、キレた日本人の怖さを忘れてるだろ。

美談にかくしてしわ寄せをさんざんよこしやがって。ちくしょうめ」

そう座った目で口にし、梅沢は酒をなめた。

あの梅沢さんが荒れている。

あの冷静沈着な梅沢さんが。

来嶋は、それが飲みながらも、心が痛かった。

指導運転士として檄を飛ばし、皆を結束させ、皆の運転の安全のために、様々に運転部として、他部署との調整をしてきた梅沢もまた、大きく傷つき、疲れていたのだ。

「梅沢さん！ では私、来嶋はここを大阪、ここを札幌として、トワイライトエクスプレス、乗務いたします！」

「おうよ！ 日本海縦貫線ロングラン、がんばれ！」

梅沢が酔いと疲れでトロンとした目で笑う。

「はい、がんばります！ 大阪駅、出発・進行！」

来嶋はそして酒を飲みながら、心は泣いていた。

この苦しみは、避難所に避難し、この神奈川よりずっと寒いなかを、僅かな暖でこらえる人々と比べれば、ずっと贅沢だ。

だが、ここで飲まなければ、この『居酒屋・銀河』も、それに食材と酒を届ける仕事の人々も、そして今精一杯に避難所に物資を運んでいるトラックドライバーのみんなも、みな潰れてしまう。

お金は、回ってこそ生きる。

そのお金が回らなくなりかけている。

物流の混乱も大きくなり始めた。

この『銀河』のおしながきに並んだつまみの多くが品切れになっている。

大勢のお客が訪れたわけでもないのに。

そして、その店の周りは、やけに明かりが暗い。

計画停電でもないのに。

たしかに節電も大事で、有効だ。事実、ウェブで流行った「ヤシマ作戦」のおかげで、それで無計画な停電は回避できている。

しかし、これから一ヶ月以上続く計画停電下での運行は、運用としては離れ業になる。

電力部も今必死に手配を苦労しているだろう。

せめて、彼らの休息の飲酒ぐらい、いいではないか。

そうでなければ、日本は、死ぬ。

避難所も大事だが、避難所を支えるのは、被災の軽かった我々と、西日本だ。

西日本が遠慮し始めているように聞く。

東日本に関係の無い歌舞音曲まで禁じて、経済にいいことはひとつもない。

その雰囲気、涙のシーンを演出するテレビが、いつの間にか作っている。

「はい、札幌場内！」

来嶋はのみほした。

「お前、酒、強いな」

梅沢が驚いている。

「ええ。うちの家系は酒好きなんです。

だからみんなで飲むときは、ビールはケース買いです」

「そうか」

大事な先輩である梅沢の顔のこわばりがとけていくことを、来嶋は、幡野と共に、心から願い、飲み続けた。

テレビはなくとも、福島第1原発の水素爆発は大きく報じられていて、それがまた重苦しいストレスになっている。

そして、人々の頭が、ストレスでおかしくなっているような兆候はあった。

だから、来嶋も酔いたかった。

しかし、輪番給電が、計画給電として行われた。
救難活動は本格化した。

そして、その夜も、被災地では、寒い避難所での生活に多くの人々がこらえていた。

それはとある児童館を使った避難所だった。

避難した高齢者から子供までが、黙って、冷たい床の上の僅かな毛布と避難したときに着ていた服だけで凍えながら、テレビを見ていた。

そこに突然声がかかった。

「自衛隊です！ お待たせしました！ 温かい御飯をお持ちしました！」

みな驚いて外に出た。

そこでは自衛隊員がテーブルを立て、炊き出しの準備を手際よくはじめていた。

「みなさんは中でお待ちください。大変寒いですから、我々が所内に配膳いたしますので」

みな、その手際の良さに感心しきりだった。

「お味噌汁もどうぞ！ 温まりますよ」

みんなさらに歓声を上げた。

「はい、どうぞ。お待たせしました」

愛想いい自衛官に皆驚き、また「ありがたいありがたい」と手を合わせるおばあちゃんまで出るほどだった。

「でもこんな時にこんなにおいしいものを」

「我々もプロです。それに我々には移動中に大勢の方の分のご飯を炊ける炊爨車があるんですよ」

その間にほかの自衛官が避難所のストーブ用の灯油を運んでいる。

避難所のみなが、明るい顔に戻っている。

「こちら第4小隊、給食配膳中」

無線で報告をしている声に、一人の若者がなんだろうと見ると、トラックの陰で集まった自衛官が、報告をする一人を除いて、缶詰に入っている鶏飯を、沢庵の缶詰をつまみながら、冷たいまま食べている。

「暖かいの食べないんですか」

彼が聞くと、みな「いえ、あのご飯は皆さんのものです。我々は今はこれで十分です。鍛えて慣れておりますので」と遠慮する。

「まず食べて、元気を出してください！」

そう言われた若者は、申し訳なさそうにしていた。

しかし、その顔に生気がもどると、彼は言っていた。

「自衛隊には、どうやって入れればいいんですか？」

「さすが米軍だよ。俺らの大先輩たちがガダルカナルでやりあったけど、きっとあんな具合にやったんだろうな」

夜の中、航空基地の復旧にあたる重機と、それを運んで強行着陸した輸送機が見える。

「こんな瓦礫だらけの滑走路に降りるなんて。アメさんも度胸あるよな。

こりゃ勝ったり負けたりだよ」

その傍らでは一度海水に没した自衛隊のF-2戦闘機を、それぞれの整備員が悔しそうに見ている。

「悔しいよな」

その間、ひっきりなしに輸送機やヘリコプターが離着陸する。

「ああ。できるなら地震のヤローに先手打って、ASM（対艦ミサイル）で飽和攻撃してやりたかった。

だが、倍にして返したくても、マグニチュード9だからな」

「ブルーインパルスも1機ダメだ」

傷んだ機体から、整備員が後ろ髪を引かれるようにしながら、去って行く。

「俺たち、これからどうなるんだろう」

「原発もあんなだし、高価な最新の戦闘機がこんなにやられた」

その時、パイロットが来た。

「大丈夫だ。この国はよみがえる。

いや、よみがえらせる。

絶対に」

パイロットは言い切った。そのワッペンに、F-2のマークがあった。

「大丈夫だ。今は世界中が味方だ。

昔の先輩は、理不尽を突きつけられて、世界を敵に回した。

でも今の俺たちには、正しいやり方がある。

誠実と信頼という正しいやり方。

だからこうして世界中が味方になってくれる。

もちろん、難癖や言いがかりはつけられる。

でも、正しいやり方をする限り、そういうつまらん連中には、つけ込まれることはない。

奴らに、上回れることは、決してない。

それが、我々の最大の財産なんだ。

そして、俺たちの守るべきものは、まさしくそれなんだ。

戦闘機は金で買えるものでしかない。。

でも、一度失った信頼は、なかなかもどらない。

逆に今の俺たちには、それがある。

一番の財産は、守れている。

それが大事だ」

整備員たちはみな、それぞれにこらえながら、うなずいた。

「こんなにおれたちが頼りにされてるなんて、元々俺たちの先輩たちががんばってくれたおかげだよ。

信頼のバトンを渡してくれたんだ。

次の世代へ、そのバトンをつなぐときだ。

俺達の先輩も、同じように、これよりもっとひどい状態から、立て直したんだ」

そして、夜が開け、3月15日になった。

北急新本社ビル、ロマンタワーに3人の背広の男が来ていた。

「事情はわかりました。

我が北急も、こうして被災された方々のお役に立てるのは、大変光栄です。

やりましょう」

「恐れ入ります」

「でも北急さんは無理を」

「大丈夫ですよ。うちはスピードこそ競いませんが、理想を目指して皆が創意工夫するのが社風となるよう、つねに錬成しております」

「うらやましい話です」

「いえ、おたくも同じ志でしょう」

「そうです。我々も目指しています。理想として。

ただ、なかなか民営化以来、余力がないまま、我々も被災しております」

「同じスタートラインの遙か後ろからの再スタートですからね。

理解しております」

樋田社長は微笑んだ。

「では、うちのものを、よろしくおねがいします」

去り際、彼らが言った。

「しかし、御社もせっかくの新本社ビルがこういうスタートですね。

なんとも」

「いえいえ、これで我々は、ここでの営業開始の日を忘れずに済みます。

マスコミさんが今回の震災から何年目というたびに、我々の戦いととも思い出せますから。

毎年、闘志を燃やして立ち向かえますよ」

「なるほど。さすがタフですね」

「いえいえ、私も鉄道経営ではまだまだ手ぬるいですよ」

樋田はそう言うと、彼ら背広の男と握手を交わした。

彼らのえりには、JR貨物のバッジが光っていた。

甲組の旅立ち

来嶋が仕業を終えて戻ると、呼集がかかっていた。

「甲組のみんな、いつも運転指導とフラッグシップトレイン・BCEとNFEの運転に尽力してくれて、心強い限りだ。

君たちの腕にはいつも感謝している。

そして、君たちの腕を必要とする人々がいる」

梅沢以下、待機していた甲組のみんなが、つばを飲んだ。

「君たちに、JR貨物への応援をしてほしい」

みな、顔を引き締めた。

「JRF（JR貨物）は現在津波や地震の被災で不通の太平洋岸の常磐線と東北本線をバイパスして日本海縦貫線まわりで被災地へ送る貨物列車を仕立て、増発するという。

しかし運転士が足りない。

JRFの運転士を助けるために、君たちの腕を貸したい。

これは正式にJRFから要請があり、国交省も承認したことだ。

できるか」

来嶋が聞いた。

「では、この北急での運転士の手配は」

「すでに特急列車はすべて運休、またBCEもNFEも、自粛する以前に周遊する線路が危険なために周遊運転をキャンセルとしている。

甲組を派遣しても、残りの運転士でやれると運輸部長と判断した」

「そうですか」

みな、考え込み、押し黙った。

しかし、口を開いたのは甲組に入ったばかりの幡野だった。

「僕のいえることではないのは承知です。

でも、僕は彼らを助けたい。

彼らの鉄道貨物を、被災地はここよりもずっと寒い中、こらえて待っているんです。

今こそ鉄道の力を見せるときです」

「おまえがいうか、というような言葉だが」

梅沢が続け、幡野は引っ込んだ。

が、梅沢は言った。

「実は、これを待っていた」

ええっ、と全員が驚く。

「鉄道の力を見せるとともに、JRFの機関士の運転を見て、どれほどかを見て、そして腕を競ってみたいと思っていました」

梅沢さん！

「JRFの運転士にも甲組のようなものがあると噂で聞いています。

そして、我々も貨物の運転に挑戦してみたい。

それは、我々のこれからの運転にも、絶対に良い経験になります」

「でも、まさか」

来嶋が口にする、樋田社長はうなずいた。

「当然、釜も自前だ。北急線から出せる旅客専用機をすべてJRFにレンタルする」

「本当ですか」

「ああ。うちの自慢の贅沢な旅客機関車を彼に見せつけたいしな」

みんな、笑った。

「そうだ。模型は持って行って自慢できるが、JRFの連中にうちの釜は見せる機会はほとんどなかった。

自慢してやろう。そして連中の釜もみてやろう。

正直、興味は十分にある」

全員がうなずいた。

「通常、他線区での運転には線見、運転転換訓練をする。しかし、練度の高い君たちなら即戦力になり得るというJRFの希望だ」

「光栄です！」

みんな、笑った。

「では、派遣する。みんな、慣れない線路の仕業になるが、頑張ってくれ」

「はい！」

声がそろった。

みな、派遣の準備を始めた。

「どこらへん運転するんですかね、日本海縦貫線だけですかねえ」

「わからん。とりあえず仙台港から盛岡貨物ターミナルまでの燃料列車の分をまず新潟・青森周りに迂回させるという。ただ、JR貨物はもっと増発するらしい」

「仙台港ですか。懐かしいな。いまどうなってるのかな」

「向こうの方の出身だったのか」

その時、幡野は口ごもった。

「どうした」

「実は」

幡野がいう・

「実家が、気仙沼なんです」

来嶋は驚いた。

「家族は」

「連絡が取れないんです。父母の家も」

「本当か？ お前、じゃあ、今回から外れて被災地と」

「いいえ」

幡野は首を振った。

「実は、彼女と駆け落ちして、この神奈川に出てきたんです。

だから、どっちみち、健在でも連絡はできないです」

「そんな！ この震災でも？」

「ええ」

「お前、それをこらえて運転してたのか！」

「はい」

来嶋はあまりのことに胸が痛く、声を失った。

「そんな状態で、よく運転を」

「それが甲組だと思っていました。

甲組になって、VSEやBCE、NFEを運転して、力量をつけてから、それから親に彼女を紹介しようと思ってました。

無理かもしれないと思うんですが。

初めての東北新幹線の切符が、片道切符だったので、復路はそういう列車で、と」

「馬鹿！」

来嶋は大声になった。

「バカだ！」

そう言うと、来嶋は幡野をだきよせた。

「お前のこと、未熟だと思ってた。」

もちろん経験時間から言って当然だった。

だが、お前のようなことは、俺には絶対に出来ない。

お前、本当に馬鹿だな。

運転バカにもほどがある！」

幡野は、涙をこらえていた。

「財布に、駆け落ちを見送った母の一笔箋が。

『夢をありがとう』って、1万円札と」

「お前」

来島は、涙を一粒こぼした。

「何故言わなかった！」

「プライベートですから」

「本当の仕事に、オンもオフも、プライベートもあるもんか。

オフでも仕事のことを何か生かせないか、創意工夫の種を探すのが甲組だ。

だから、オンの、乗務時に、落ち着けるんだ。

お前は無理をしすぎている。

それで事故ったらどうするんだ！

お前の手にお客さんも、この北急もかかっているんだぞ！」

来島の口調は、言葉こそ責めていたが、声色は悲痛な哀調だった。

「バカ！ お前は本当にバカだ！

師匠の俺の指導が届いてなかったのか！

俺に打ち明けもせずに」

「来嶋先輩に余計なことを思ってほしくなかったんです」

「余計なわけがないだろう！ 血のつながった、両親だろ！

そんな無理ができる人間がいるはずがない！」

ロッカールームのこのやりとりに、皆が集まり始めた。

「幡野さん、我々でご両親の安否を確認します！」

「上手く行けば避難所の名簿にあるかもしれません。今はウェブで確認できます」

「だから、無理しないで」

「無理って」

幡野は口をパクパクとさせた。

「先輩たちの神技に近づきたくて、ただそれだけの日々で」

「馬鹿だな！」

「そうですよ。私たち、家族もいるけど、私たちも北急という一家じゃないですか！」

「本当に、なんでそんな我慢を」

「十分頑張りましたよ、幡野さん」

すると、幡野はうつろにしていた目から、しぶきの出そうなほどに涙を溢れさせた。

「こらえていたんです。それが両親の教えなんです。」

父も鉄道員でしたし、父は人を救う鉄道を大事にしていました。

だから、父のように、立派な、鉄道員になりたくて」

幡野は震えだし、嗚咽しながら崩れた。

「馬鹿だ！ お前は馬鹿だ！」

来嶋はそう言いながらタオルを取り、幡野に渡し、そして彼を抱いた。

「甲組だって人間だ。人間じゃなければ、運転なんか出来ないよ。

そんな心閉ざしてるなんて、ありえないよ、ありえない」

来嶋も涙があふれていた。

「師匠にも、仲間にも打ち明けないなんて、そんなのナシだよ。

やめてくれよ、そんな我慢。

そんなの無理だよ」

来嶋の泣き声の周りで、皆、鎮痛にうつむく中、一人が涙をこらえながらウェブ検索をするPCのキーボードの音だけが響いていた。

「そうか、わかった。そのことは総務課にさせよう。

もし幡野がおかしかったら、乗務と今回の派遣から外すしかない。

彼にとっては辛いだろうが」

樋田社長はすぐにこの幡野の件の連絡を受けて指示した。

家族親族に被災者の居るもののリストが目の前のPCに浮かんでいた。

「こんな狭い島国に身を寄せ合って暮らしている俺達に、マグニチュード9の地震なんて、どんな無茶なんだよ。

ちくしょう」

樋田は机を軽く叩いた。

「絶対許さない。いくら災害だと言っても、こんなこと許せるはずがないじゃないか」

その向こうに、新宿の高層ビルが済んだ空にそびえている。

その日、EH510を先頭にして牽引させて、EF510 600、EF510 1、EF-Y500が、新戸田経由で新潟に向けて出発した。

その道中の運転はJRに任せ、甲組のみんなは、12日に運転を再開した上越新幹線に向かうことになる。



梅沢が派遣組の組長となった。

「なんか梅沢さんが組長なんて、ヤクザみたい」

「そんなわけないだろう？ 『仏の梅沢』だぞ」

梅沢が言うと、みなは「そう言うのは梅沢さん一人ですよ。『鬼の梅沢』の自覚してください」とツッコんだ。

「まあ、仰々しいのも何だが、これってのも」

と言いながら、樋田は旗を、秘書がヘッドマークを持ってきた。

「これは」

「まず北急復旧派遣甲組の隊旗と、「がんばろう東北」の北急派遣列車のヘッドマーク。

急いで作ったので手作り感たっぷりだが、勘弁してとデザイン部からだ。

ヘッドマークはJRが付けるのを許してくれた」

「十分ですよ」

引き渡すところを、数社のマスコミと、本社広報部のカメラマンが撮影した。

「行って来い。無事でな」

「わかっています。切符はちゃんと往復きっぷですから」

みな、その旗を先頭にバスに乗った。

そして、東京駅から新幹線に乗る。

途中の渋滞は、ガソリン給油待ちの列だ。

被災地だけでなく、こうした首都圏でもガソリンの需給がおかしくなっているのだ。

そして東京駅に着いた。

旗をしまおうとすると、JRの駅員がそれをとどめた。

「我々の東北の各支社も被災しております。

北急さんが味方になってくれると思うと、心強いです」

他の駅員も顔をのぞかせる。

「お元気で。そしてまた、BCEを走らせてください。

その日まで」

「ええ」

駅員で手すきものが集まりだした。

「では、行って参ります！」

梅沢の声に、東京駅のJR職員が、敬礼した。

新幹線が走りだす。

「少しでも鍊成の時間を短縮したいと思っていたら、JRから運転のアンチヨコがもらえた。俺たちならこれと地図である程度概要がつかめる」

「ありがたいです」

「運転区間はJR関東支社管轄の日本海縦貫線。

仕業はJRが乗務割を作ってくれるという」

「はい！」

駆け抜ける新幹線のなか、甲組の皆、車窓に気もとめずに資料に見入っている。

「みんな、どっちにしるテツだからな。今更車窓にどうこうともないか」

そして夜、一行は新潟県長岡のJRの運転区に到着した。

「すぐにでも線見したいが、俺達は難易度の低い昼間の運転からだという」

梅沢が言うと、事務の女の子がペットボトルのお茶を配った。

「失礼する」

その声に、みな注目した。

入ってきた彼は、梅沢とアイコンタクトした。

「私は上沼という。JRF関東支社、富山から酒田までの区間を運転するこの南長岡運転所で指導運転士をしている。

我々もあなたたち甲組のように、特別錬成組として特級機関士という制度を作った。

大幅増発の支援、深く感謝する。シミュレーター訓練、そして添乗しての線見となる。

よろしく頼む」

上沼と梅沢の視線が、火花を散らす。

互いに、できるな！という敬意と闘志の火花である。

みな、武者震いを久しぶりに感じていた。

シミュレーターでの運転錬成は夜まで続いた。

機械が少ないので、みな交代交代で休みながらの実習である。

「さすが飲み込みが早い」

JRFの機関士が褒める。

「いえ、まだぬるいです。ここでの連続勾配の運転が納得行かないです」

「でも次の閉塞信号までのレベルで回復できますよ」

「いえ、これでは甘いです」

甲組は一人終わるごとに検討会をして、運転の要点を洗い出していく。

その日、成田に着陸するビジネスジェットがあった。

飛行するだけでなく、ただ駐機するだけでも多額がかかるビジネスジェット機から、2人のビジネスマンと、その秘書とスタッフが降りた。

それを迎えに、樋田社長がやってきていた。

「ようこそ日本へ。我が社へはヘリで移動してくださいとセキュリティがアドバイスしましたが、しかしこちらのほうがお好みかと」

「おお、鉄道切符か。わかってるね」

彼は言った。

「しかし、よく調べたものだ。

私が始めにPCをいじりだしたのは、たしかに鉄道模型の自動運転システムの開発だった。

以来鉄道には目がない。ただそれを知られると困るから、結局交通量計測とか給与計算を作ったのがはじめとしている」

「私もまだまだぬるいですが。ビジネスマンです。ご両人のことは存じあげておりました。

そして、わが北急のことにご興味いただけていることも」

「BCEは私も唸ったからね。あれは夢の列車だ。VSEもE655Y編成もいい」

彼はしみじみという。

「行きは京成スカイライナーになります。標準軌とはいえ在来線のスーパー特急のスピードと山本寛斎デザインをご堪能ください。帰りにE259系成田エクスプレスを予定しております」

「残念だ。BCEの旅がしたかったが」

「すみません」

「いや、君の責任ではない。マグニチュード9の前では人の力は小さすぎる」

「そのかわりこのお部屋を用意しました」

駅でボディーガードを連れてあゆみ、列車に乗る。

「なんと！ レイアウト付きのトレインビュールームか！」

「ええ。我が北急HDのハイラットホテルで、新宿駅に発着する列車の見える部屋をレイアウト付きのお部屋にしております」

「いつも部屋が広すぎるのは嫌なんだが、これだといいな」

「無線LANもありますし、それと朝食にフィレオフィッシュを」

「なるほど、これが『おもてなし』なわけだ」

「私自身、鉄道が好きになってから、あなたをさらに尊敬することになりました」

彼はうなづいた。

「ありがたい。どっちにしる松芝とのプロジェクトの今後についての会議があるのだが、実に楽しい出張になった。

ありがとう。君にはいろいろ話せそうだ」

「恐縮です」

彼はシートの座り心地を試している。

「まもなく160キロに達します、こちらに地図が出ます」

「見所だな。うん、TGVなみの迫力の走りっぷりだ。在来線でもここまでやるんだな」

「ええ。我が社ではここまでのスピードは出せません」

「そのかわり、乗って楽しいというわけだな」

「恐縮です」

周りの乗客は、ひそひそと、彼の噂をしている。

「面倒なもんだよ、金持ちになっても。でも初芝のプロジェクトが心配で」

「お察しに余りあります」

樋田社長は彼に頭を下げた。

しかし、彼を見ていると、その利発な瞳が、実に魅力的だ。

毀誉褒貶が激しい人物だが、光が大きいと影もできてしまうのだ。

だが、この彼が決意しなければ、ここまで世の中は加速しなかった。

そして彼が柔軟な知恵の持ち主であることは、その手にしたいくつもの携帯電話でわかる。ちゃんとライバル社の携帯も持っているのだ。手にしなければこういうモノのアイディアは沸かない。

今は金がいるのではない。金は使ったらそれまでだ。

知恵がほしいのだ。知恵は無限に金を生む、打出の小槌なのだ。

そして、彼がフォーブスのランキングで首位争いするのは、まさにそれを手にしているからだ。

ホテルにつくと、彼らはすぐに部屋に向かった。

「あれを」

彼は秘書にアタッシュを持ってこさせた。

「ゲージはナインだな」

「そうです」

彼の取り出したアタッシュには、世界各地の列車のNゲージが収められている。

「あ、リレーラーをどうぞ」

「いいね」

彼は目を細めながら、列車をレールの上に置いた。

「パワーパックはこちらです」

「なんと、ワイヤレス・パワーパック！

いいね、ますますいい！」

彼は夢中になった。

「我社でも鉄道趣味のソフトを出したが、まだまだこういう現物の模型も楽しいものだ。

思えばあれに最初に出した列車が、北急LSE、7000形だ。

私の好きな列車だよ」

「模型ございますよ」

壁のケースに、そのNゲージがある。

いいね、と彼はさらに喜ぶ。

「羨ましいよ。北急は経営の規模としては丁度良くコンパクトだ。

私も手がけたいが、あのプロジェクトのためには、な」

「存じております」

「本当に、被災のお見舞いをするよ。

しかし君もタフな経営者だな」

「あなたには及びません」

「もう一度言って」

なんと、彼もあのコマーシャルを知っていた。

「いやですよ」

みんな、笑った。

樋田は、笑いながら思った。

こんな災害が起きても、みんな、笑う。

下を向くな、ヘッドライトをともせといった。

正直、心が折れそうなことが福島原発では続いている。

だが、

だから、この彼の来日が必要なのだ。

樋田社長は、口を一回引き結んだ。

絶対に、屈してたまるか。



北急運転甲組が、JR日本海縦貫線の運転を錬成して迎えた昼休憩のときだった。

「来た！」

貨物機関車には絶対のないメロディアスなホイッスルの音に、運転所の多くのものが出て出迎えた。

北急の機関車が届いたのだ。

「さすが、みなしっかりやっている。鉄道一家は不滅だな」

回送の運転をしてきた運転士が、興奮したまま帰着報告し、そして運転の感想を話す。

さっそくJRFの機関士たちも、今では絶滅からまぬがれた、この珍しい旅客機関車を見ている

。

「おい、機関車なのにワンマスだって！ そんなズルイよなあ。

某JR対策でも、ずいぶん思い切ったよなあ」

「甲種から一週間しないで派遣とか。どこまで悲運なんだよ」

皆の顔は明るい、疲労の色は隠せない。

日本海縦貫線もまた、被災していたのだ。

「内装も良いよなあ。シートも良いシートだ。何から何まで贅沢仕様。

たまらんものがあるね」

「よろしくおねがいします」

皆、握手した。

「鉄道の力を、見せる時が、もうすぐだ」

順次、線見をしていく。

「難儀ですなあ」

JRの運転士がねぎらう。

「ここで曲線走行抵抗がかかる、と」
助士席で来嶋がメモを取っている。
「皆さんでそのメモを共有するんですか。
新線開業みたいですね、まるで」
すると、来嶋は言った。
「北急電鉄日本海縦貫線・開業というつもりで頑張ってますよ」
「なるほど。納得いくまでそうやるんですね。さすが甲組」
信号が遙か遠くに見えた。
「第2閉塞、進行！」
「進行！」
そろって喚呼する。
「大昔、機関車が2人乗務の時は、こんな感じだったんでしょうね」
「そうですね。普段は一人乗務ですから」

そして、続いて北急甲組の機関士が運転し、JRFの機関士がサポートしての乗務となる。
「すごい適応力ですね」
「褒めても逆さにしても鼻血も出ませんよ」
と冗談を言いながらも、慣れない日本海縦貫線の運転技術について、試していく。
「ノッチはここはもうちょっと入れたほうがいいですね」
「そうですね。さっき入れてなかったのが、ちょっとここが苦しい感じになりますね」
「で、そうするとここからに微妙につじつまが合わなくなる。
レベルの直線だったら全部リセットされるんで、まったく気にすることは無いんですが」
「いえ、やはり運転する以上は工夫します。安全マージンが増えるように定時運転を守るためには基本です」
「まったくそうです。でも、そこまで気を張ると持ちませんよ」
「そうですね」
幡野は気を落ち着けた。
「すみません」
「いえ、ここまでの適応力とは、全くお見それしました。
すばらしいですよ。
これで安心してあなたたちに、昼の運転はお願いできます」
「でもやっぱり貨物は重いですね。コンテナを満載するとかなり重たい」
「感じますか」
「ええ。はっきりと分かります。通勤電車や特急電車と全く違います」
「なるほど」
「慣性重量の大きさのレンジが違います。慣れてきましたが、他のみんなも習得しなければなら
ないのです」

そして、見習運転を終えて、また検討会を行う。
その間も、つけっぱなしのTVでは被災地の様子と、人々の悲しみや叫びを伝えている。
「やはりガソリン不足が大きいな」
しばしの休憩の間、みな飲み物を飲み、休みくつろぐ。

その間に来嶋は北急の運転区に電話を掛ける。
「なんですか？」
「いや、みんなが心配で」
「大丈夫ですよ、我々も頑張っていますから。
甲組でなくても、我々は一人前の運転士ですよ。
ちゃんとやっています。
こんな電話かけるなんて。いらぬですよ。その分もっと頑張って、被災地への力になってや
ってください。
ぼくらの気持ち、届けてください。
ぼくら、何があっても、来嶋さんだったらどうするだろう、って考えます。
そうすると、落ち着いて余裕が持てるんです」
「ありがとう」

来島はそう答えたが、なおも言いたくなる。

「ほんと、先輩、しっかり！」

来島は我に帰った。

「わかった。信頼している」

「ええ。任せてください！」

不安のマネジメント

その電話を受けた北急の運転区では、甲組以外の運転士が出発と帰着の点呼をしている。

そしてそのあとは、流しっぱなしのTVの原子炉の事故に、皆目が行ってしまう。

「大丈夫なんだろうか」

「200キロ圏内はやばいって」

「それ誰が言ったの？」

「いや、それは知り合いの知り合いが」

「それこそデマの源だろ」

一人がすぐにウェブ検索する。

「なんだ、前の総理か。あの宇宙人、ルーピーがおかしな事言うのは、別に今に始まったことじゃないだろ。」

普通にスルーしろよ。普通にちゃんとググってたしかめてさ。

あと、だとしたら問題と思われる、というのも禁止な。たいがいデマだから」

そこに今夜の食事当番が帰ってきた。

「なんなんだ、あのスーパーは」

「品切れか」

「ああ。今流行の買いすぎだ。あれは病気だな。」

入荷してもみんなまとめ買いだつてさ。

それなのに、あんな品薄だった食べるラー油が残ってるとか、なんかの冗談だろと思うよ」

そう言いながら、彼はケーキをテーブルに置く。

「なんだ、今日は誰かの誕生日か」

「いや、パンが売り切れでケーキだけ残って安売りしてたから、どっさり買ってきた。」

パンが無ければケーキを食べればいいじゃない、ってなんてマリーアントワネット状態なんだよ」

皆が笑った。

「でも甲組がいないと、なんか寂しいですね」

「ああ。あの人らと一緒に仕事できてたのが、すごく懐かしく感じる」

みんな、少し黙った。

「でも、普通に戻るさ。」

またみんなで夜の業務研修もできるさ」

「そうだな！」

「ヘッドライトは、俺達も灯し続けるんだ」

「ああ！」

「ういっす！」

「押忍！」

声が帰ってきた。

「俺達のこと、乙組って呼ぼうか。なんか甲組以外の呼び方なかったからさ」

「乙組か。悪くないな」

「よし、そうしよう」

ダイヤはまだ減力運転中だった。

そして、計画停電も実施されていた。

「そのうえ原子炉はどこまで悪くなるか分からない」

「まあ、それは俺達は専門外だからなあ」

その時、樋田社長がやってきた。

「御苦労。そういう話題であれば、各国の駐日大使館が自国民にどうするかを見ていればいい。

彼らは日本に義理はないが、日本駐在の自国民を守る義務がある。

本当に率直に彼らは報告している。

それで見ると、おそらく結論はもう出ているんだろう。

英大使館は現状は妥当だから無理に逃げる必要は今はない、としている。

日本政府が隠蔽しているなら、彼らと食い違うはずだ」

「でも、それが裏で繋がって」

「ないないない。だいたい今の政府にそんな気の利いたことなんかする能力無いのは、それこそ今始まったことじゃない。

俺は社員と沿線の皆に責任がある。その情報はちゃんと必要に応じて流すから、俺を信じてくれ」

皆、ういっす！と礼をした。

「でも、有名人が逃げろ逃げろってネットで」

「有名人がどうして有名かは分からないが、べつに仕事に関西で出来れば、ここにしがみつ়くことはない。むしろその分省エネになるからいいことだ。

事故尺度が5だ、っていうが、6が妥当だろうな。でも7まではっていない。

5のスリーマイルよりははるかに悪いが、7のチェルノブイリといっしょにするな、ってことだ。

まず放射能と放射線と放射性物質の区別が付いてない話は基本的にダウトだ。それぞれちがうからな。

『うんち・おならで例える原発解説』がとりあえずわかりやすいな。あと計画停電についても、ウェブで良いページを作っている方がいる。

ウェブとテレビとラジオを使い分けるのが一番だ。暇は必要になるが。

どれかにいれこみすぎると、迷路に入る。特に信頼できないと思い始めたら、頭の冷却がいる。信頼を疑ったら、とことんまで何も信じられなくなる。一番それが危ない。

あと、漫画家の西原理恵子が、「パニックは決断力のある方向音痴が起こす」は名言だな。全くそのとおりだよ。

皆、落ち着いた。

「多分、原発の解決は、今法的整合性と根回しの段階と、直接冷却の段階だ。ドッカーンと水蒸

気爆発すればヤバイが、今はバン、って作業場の屋根が吹っ飛んだだけだ。

責任追及は落ち着いてからすればいい。それとぶっちゃけ。俺には海外に別荘がある。いざとなったらいつでも脱出できる。

でも、脱出しない。その必要はないし、今の仕事をやるほうが大事だし、それが好きなんだ。だから心配するな」

「お子さんと奥さんは」

「普通に六本木のマンション住まいだ。疎開もさせてない。そこまではする必要はない」

皆、うなずいた。

「でもアメリカで80キロ圏内、シンガポールは100キロ圏内退避を勧告したって」

「まあ、80キロ100キロというか、五十歩百歩だな。逃げたければ、逃げられるなら自由に逃げればいい。それを日本は止めない。逃げる自由がある。事故尺度はどうかんがえても6だが、それが逃げるなとかいう社会なら、その社会そのものの危険尺度が7になっちゃうさ。ばかばかしい」

「なんか、社長無双モードを拝見しました」

「そうか？ 極めて普通だが。みんな、頭をしっかりと冷却してくれ。そして、ちゃんと御飯食べてな。腹減ってるとうライラするからな」

「はい！」

みんな、それでも、不安は完全には消えていなかった。

それが、樋田にとっては辛かった。

部下の、妻の、子の安全は、絶対に守りたいのが人情というものだ。

ただ、その情に流されるな、ともいう人間もいる。

樋田は、最悪をなんども想定した。

しかし、最悪、というのもまた極論の一つだ。

社長業の辛さだな、と樋田は思った。

トイレに言って、手を洗って、鏡で自分の顔を見た。

ちくしょうめ。

樋田は小さく声にした。

こういう時こそ、マネジメントなんだ、と樋田は自分に活を入れた。

そして、ファイトだ。

屈するもんか。絶対に。

樋田は自分を叱ってから、またみなの大部屋に戻っていった。

終電の出発

夜がまたやってきた。

この日も、良いニュースと悪いニュースがごちゃまぜになっていて、ただひたすら、こらえるしかなかった。

しかし、減便とはいえ、北急は営業運転を続けることができた。

樋田はたまたま、用務があってまた新宿駅に行った。

百貨店と沿線事業部の話だった。

やはり風評被害が発生していた。全く頭の痛い問題だが、対策は難しい。

そして、樋田は会議を終えて気づくと、北急の新宿駅にいた。

終電が出発するところだった。

駅長が見送る。

樋田も、一緒に見送った。

赤いランプが、曲がりくねった新宿駅のホームに沿って揺れていって、彼方へと去って行った。

なんとも寂しく、またそれが独特の情感を持っていた。

とりあえず、うちは無事に営業運転を終えた。

その無事が、何ともありがたかった。

これから保線や架線の作業はまだある、

電力部も、電気の確保にまた東奔西走だろう。

それでも、営業が終わることの安堵は、大きい。

樋田には、少なくともそう思えたのだった。

まだまだ被災地の苦しみ、悲鳴が止まらない。

なかには餓死者が出た、凍死者が出たなどというメッセージもある。

あまりにもそのメッセージが多く、調べると様々な人間が引用して拡散していた。

常識で考えると、つじつまが合わないことが多いメッセージだった。

しかし、それをとがめることもできないほど、全体の状況が悪かった。

原子炉の事故も、解決にはほど遠い。

樋田は帰りにタクシーに乗った。

遠くの霞ヶ関が、こうこうと明かりを点けていた。

今、この未曾有の災害に対抗し、対策する様々な手続きをしているのだ。

樋田も同期が何人も国家一種試験でキャリア採用されている。

みな、同じ世代で、頑張っている。

不安の時代と言われてきた。

それが、具体的な近隣の死という事実になり、大きな衝撃になった。

株式相場も徹底的に乱高下していた。

これからどうなる？

なりもしない。

こんなことでくたばるわけにはいかないんだ。

樋田は、自宅に着いたタクシーの運転手に起こされた。

「すみません」

謝りながら、被災からの緊張と防衛本能の興奮が、大きな疲労になっていたのだな、と思い返していた。

それでも、あすもまた電車が走り出す。

そのためにみな、夜の点検と整備をしている。

明日は、どうやってもくるのだ。

まだまだ決断の求められる事態は続いている。

そのためにも睡眠を。

六本木の高級高層マンションの自宅に帰った。

妻が待っていた。

すまないというと、妻は「あなたが頑張ってるのを応援したくて結婚したのよ」とほほえんだ。

そして、息子の寝顔を見て、キスして、そしてベッドに沈んだ。

<11年3月22日ここまで・続きます>

夜が明けた。

「お疲れ様です」

JRの運転士に声をかけながら、来嶋は点呼台に向かう。

「では、出発点呼をお願いします」

来嶋が助役の前で点呼を受ける。

しかし、その助役も、この詰め所も、北急ではない。

JR貨物だ。

「以上、では出発します」

JRの助役はうなずいた。

「いいね。実にきびきびとした点呼だ。

うちの特級運転士に自負を感じていたが、甲組もなかなかだ。

こりゃ、競い合いになるな」

「ええ。研鑽していきます」

「君たちの錬成の様子を少し見て、まさに火の出るようなすさまじい検討だった。

まさに創意工夫と熱意に満ちていた。

君たちなら、できる」

「恐縮です」

「頼んだ」

「はい！」



すでにEH510が、構内運転士によってコンテナ列車の前に連結されていた。

旅客専用機のEH510がコンテナの前に立つのは、想定されていなかったことだが、しかし特に

問題はない。JRもEF510 500番台を貨物にも使っている。

そういうマルチロール化は当然の趨勢だ。

「牽引定数が大きいので、助かります」

入換係が声をかけてきた。

「H級の大型機関車は我々にEH500があるんですが、それ並みですから、本当に頼もしいです」

「ありがとうございます」

来嶋は答え、そしてキャブに上った。

いつもの運転台だが、その前の線路もまた、練習はしたが、慣れ親しんだ北急の線路ではない

。

モニタ装置よし、ATSよし。

しかしこういうときに北急の機関車は役に立てる。

ほとんどの私鉄が機関車を廃止する中、北急はとくに機関車を保有することに熱心だった。

しかも、すべてJRのATSなども装備している。

日本一周クルーズ列車・BCEの牽引のためだったのだが、それが役に立つ。

まして、私鉄がJRに機関車を貸すなんて、聞いたことがない。

だが、今回はそれができる。

何とも栄誉なことだ。

貨物ターミナルの出発線の出発信号に青がともる。

「出発、進行！」

来嶋は白手袋の指で喚呼し、ノッチを投入した。

EH510が、1500トンのコンテナ列車を引き出す。

異常なし。

すっと滑り出す列車に、来嶋はほほえんだ。

初めてのコンテナ貨物だが、この子、この機関車も、武者震いも終えて、走り出せる喜びに満ちているように感じた。

朝の中を、列車が走り出す。

寝台特急『日本海』も走っている。

まだ『トワイライトエクスプレス』は走れないが、でも着実に回復していつている。

社長の言葉を思い出す。

ヘッドライトを灯すのだ。

もちろん、迷うこともある。

でもそのときは、立ち止まれば良い。

俺たちなら、できる。

本線に入った。

いよいよ腕の見せ所だ。

すれ違う貨物列車が、ホイッスルと運転士の挙手で挨拶する。

こちらメロディホイッスルで答える。

コンテナも結構いいもんだな、とその貨物を見て思う。

貨車に5個ずつコンテナを積んだ車列の、独特の量感、迫力。

まさしく、日本を動かす力だ。

近畿と北海道を結ぶ最短経路、日本海縦貫線。

これが動いていることは、北海道と近畿西日本が経済力を発揮できることになる。

本当に頼もしいことだ。

来嶋は運転操作を続ける。

日本海岸を、北急の誇る駿馬、EH510が、日本の動脈を守るために、駆ける。

「良い兆候も見えてきたな」

樋田社長がTVについて、漏らす。

「一つ一つ、確実になっている。

何が起きているかがわからない状態が一番怖い。

それが、センサーがすべてでないにしろ、生き残っているだけまだ良い。

本当の悪夢は、センサー全滅だ。それだってあり得るか俺は覚悟した。

最悪を覚悟するってのは、そういうことだ。

だが、それは回避され、何かが起きても、ちゃんと何が起きているかを確実にしている。

それでも長期戦になるだろう。汚染もあるだろう。

だが、今はそれぞれの人間が、それぞれの分野で、奮闘するときだ。

あそこにいるのは、俺たちと同じ、プロだ。

彼らを信じよう」

秘書はみな、うなずいていた。

「災害の研究での、フェーズも進んでいる。

想定内になってきた。

しかし、派遣した甲組、今頃運転している頃だな」

「ええ。我が社の誇る、甲組運転士です。

きっとやってくれるでしょう」

「ああ。あいつらにはいつも助けられる。

俺たちも、留守を守らなきゃな」

「被災地はどうなんでしょう」

「まあ、それはいずれほかの誰かがあとで描くだろう。

そうして知識が蓄積されていき、人類は適応し、進化する。

その力が発揮されているよ」

乙組の活躍

相模大川の運転詰め所で、乙組運転士たちが、減力運転中の北急線の運転にあたり、出発点呼し、帰着点呼し、その前とあとで休憩をしている。

「みなさーん、これ持ってきました」

それはデザイン部のデザイナーだった。

「乙組の隊旗です！」

みんなが集まって見る。

「いいね！」

「ほんと、甲組に渡したのよりよくできるのが辛いです。

知恵って、あとになればなるほど回る。

今いけるのであれば、甲組のみんなが持って行ったのを取り替えてあげたいです」

「そんなことないわ」

そう乙組指導運転士・今井ヒカルが言う。なんと乙組の指導運転士は女性だ。

「それはみんなそう。あとになればあとになるほど何でも、うまくなる。

だから、それを気にしないで。

あなたたちのすることも、まだ一杯ある」

デザイナーが目を腫らした。

「デザインでは、こんな災害に何の役も」

「そんなことないわよ。こういうときだからこそ、元気の出るデザインを。

減力運転のお詫びチラシも掲示も、あなたたちしか作れないわ」

ヒカルはその小柄な身体の上、整った小顔の利発な目を向ける。

「人はパンのみで生きるにあらず。

私たちはパンが幸いある。被災地にはパンがない。

でも、私たちが充実すれば、それは被災地に逆の波のようになって、その充実が伝わり、あの忌々しい津波を押し返せる。

それが、負けない、屈さない、そしてヘッドライトを灯すという意味でしょう？」

デザイナーは納得した。

「ありがとうございます。みなさん、ご安全に！」

乙組のみんなが、「承知！」とそろって答えた。

運転士が二人でトイレに入っていた。

「ヒカルさん、なんで乙組なんでしょうね。

甲組の技量があるのに」

「甲組入りを遠慮してるらしい。

でもおかげで、俺たち乙組もがんばれる」

「そうだな」

「昇進すれば給料も増える。

でも、それで失うものもある。

特に俺たちはそうだ。

確かに特別錬成を受けていないが、受けられないだけじゃない。

受けなくても、俺たちは十分なんだ。

それぞれの役目を果たすとき、甲組は頂点だが、それを支えるのも大事な役目だ。

甲組を尊敬しているが、乙組には乙組の誇りがある。

そして、今は甲組が必要な特急の運転はできない。

その分、甲組はJRを助けに行っている。

いまこそ、俺たち乙組の踏ん張り時だ。

ヒカルさんは、それを確実にしてくれる」

「ありがたいよな」

二人はそういいながら、用を足して手を洗って戻っていく。

電力区では、電力供給の安定の努力が続けられている。

保線区は、保線作業用のディーゼルカーの燃料が心細くなってきた。

さまざまな物品の需給が、まだおかしくなっている。

その上、とある銀行のオンラインシステムがおかしくなっている影響で、コンビニATMで文句を言う人が時々で始めた。

「我が沿線も計画停電区域になります」

「致し方ない。みなができることを精一杯やった結果だ」

「運転区新戸田派出が計画停電します」

「非常用の灯りは」

「持って行っています」

「本当に申し訳ないが」

「いえ、乙組の連中、いっすよ、なんて言っていました」

「そうか。空元気も元気のうちだな」

「懐かしい漫画の台詞ですね」

「ああ」

計画停電の夜

「あと10分で停電になる。

充電は？」

「十分です。ノートPCもケータイも充電したし、PCは電源を落としました」

「まあ、この派出所の休憩施設の停電だから、大丈夫だろう。

しかしテレビがカウントダウンしてくれればありがたいのになあ。

今のテレビは時計の役もしてくれないな」

「忙しいとはいえ、もうちょっとなんとか」

ここの乙組のみんながうなずいた。

「夕食もすんだ。くるならこい、だ」

「あと1分」

みんなが息をのむ。

「今！」

と時計を読む。

「あれ、切れないよ」

「ついてるね」

「停電しないね」

みんな顔を見合わせた。

「東電さんががんばったのかな」

「すごい！」

といったとたん、バツンと真っ暗になった。

「非常灯つけて」

「やっぱり停電しましたね」

「だから計画停電なんだよ」

そう言いながら、一人がノートPCを見ている。

「すごいな、ノートPCの液晶のバックライトって、こんなに明るいんだな」

「非常灯よりこっちのほうがいい」

「一応、スペックでは停電が終わるまで持つんですが」

「ありがとう。持たなくても十分だ」

「ちょっと、トイレいきたくなかった」

「非常灯持って行け。足下に気をつけてな」

「すみません」

そうしながら、みんな、多愛のない話をしはじめた。

新しい列車の話、この災害の時に運転が始まった九州新幹線の話。

「運が良いとか悪いとかはあるんだなあ」

同じく、恵日奈で明日開店する鉄道模型店の話も。

「そのうち行って、なんか買ってやろう。あそこの模型店がいったん閉まって、ずいぶん寂しかったからな」

そう言っているうちに、「寒いな」と言い出した。

「思いの外、寒くなった」

「いいよ、このままベッドに行こう。布団の中だと暖かいさ」

みな、仮泊所の寝室に移動した。

「不謹慎だけど、なんか修学旅行の夜みたい」

「先生に隠れて酒飲んだりな」

「えっ、おまえもやってたの？」

「そりゃ、悪いことだけど、ああいうことはそういうことしたいのさ。ガキだから」

「まあ、人に迷惑かけるわけじゃないし」

そのうち「なんかぬくぬくしてるし、寝ちゃいそう」という話になった。

「寝てかまわないさ。そのためここで仮泊しているんだから」

「じゃ、失礼します。お先に」

彼が目をつぶった。

そして、彼が目を開けると、みんなが非常灯で照らしながら、彼の顔にマジックでいたずら書きしようとしていた。

「なんだおまえら！ ひでえな！」

怒る彼に、みな、爆笑した。

「不謹慎だよ！」

「だからいいんじゃないか。

こういうことは、俺たちだけの思い出にしよう」

彼も、思いを受け止めた。

「そうだな」

「お帰りなさい」

樋田社長は成田から来た彼を神宿でエスコートする。

都区内は計画停電範囲外なので、停電はない。

「初芝電気の連中に、負けるなと言っておいた。

心が折れるかもしれないが、折れても十分直ると。

プロジェクトに出資している私が良いと言っているんだから、安心してほしかったんだが」

「なかなか、一度失った信頼も自信も、回復が大変ですね」

「まあ、みんな頭を冷却だ。海外でもどんどん不安が波及している。

でも、不安は不安でしかない。

その上、不信を抱いてしまったら、とことんまで何も信じられなくなる。

正しいことをしていることを自覚しなきゃ、だな」

「夕食は？」

「初芝の連中と食べてきた。寿司だ。

おもえばジャンクフード好きなんだが、寿司はさらに手軽でうまいな」

「日本人としてうれしいですよ」

「ほんと、東京にいれば世界中の食べ物が食べられる。

日本人は食文化がある。それも実に奥深い」

「では、お部屋へ」

すでに例のレイアウト付きトレインビューの部屋は彼のために押さえてある。

「自粛ムードでこのホテルも空き室が目立ちます」

「まったく、必要のないことだが。空気読めというのは、日本人のよくないところにもなる。

で、すまないが」

「ストレスがたまるとこれですね」

そう言いながら樋田が秘書から受け取り、「プレゼントです」と渡した。

「なんと！」

彼は驚いた。

「これは北急ロマンスカーLSEじゃないか」

「しかも特製品です。うちの社員の模型好きにパーフェクトグレードにさせました」

「すごいな！」

彼は興奮を隠せない。

「いや、すごい。これは。ありがとう。大事にするよ」

「運転してみてください」

「もちろんだ」

早速リレーラダーで模型をレールに乗せる。

「接続車ですので、ちょっとコツが要りますが」

「大丈夫、慣れてる」

そして、NゲージのLSEが走り出した。

目を細めて愛でる彼が、息を吐いた。

「本当に君は会社を、鉄道を愛しているんだな」

「ええ。私のすべてです」

「そこで、あの計画か」

「恐れ入ります」

樋田は本題に入った緊張を飲み込んだ。

「無論、答えはオーケーだ。

我々は断じてここで屈してはならん。

まして、この事態にそういうチャレンジをするのは、私を熱くさせる。

確かに鉄道オーナーはみな、それを夢見る。

それがとくに今回はチャレンジングで良い。

理解できるものだし、私もそれが現実になるのを見たい」

「ええ」

「もう3周させてくれ。その間にサインの準備を」

と彼は彼の秘書に命じた。

そして、サインした。

「アメックスのブラックカードで一括払いもできるんだが、それじゃ君もあとが面倒だろう。

君のところの『おさいふ』さんとの合意の形で行う」

「ありがとうございます」

樋田は頭を下げた。

「この件にかかわらず、明日は」

彼は笑みを隠せなかった。

「いよいよ、BCEだな」

「そうです」

線路の夢

ぱっと灯りがついた。

ここは、新戸田派出の仮泊所である。

「おっ、ダウンタイムの終わりまでまだ10分ある。停電、少し短くなってる。東電もがんばってるな」

「一応おかしな電気機器がないかチェック。再通電後おかしくなることもあるぞ！」

「ああ！」

「そうですね」

「でも、寝てるな、あいつ」

みな、ベッドで寝込んでいる仲間を見る。

「疲れてるのさ。」

それでも乙組だって、工夫を欠かさない。

それが北急だよ」

「ああ。俺たちの、俺たちによる、俺たちの夢の線路だ」

夜の日本海縦貫線の貨物の運転は、JRFの機関士が行い、昼間の運転は北急甲組でおこなう。
それが2日目に入った。

昼の運転から戻ってきた機関士たちが話している。

「あの鉄橋を過ぎた50制限の入りと出方ですが」

機関車のデータロガーを使っての検討をJRF特級と北急甲組がおこなう。

「まったく、なんて奴らだ」

JRFの機関士が舌を巻く。

「あの順応力はすごいよ。実に細かく検討して、しかもその上を目指す」

「あいつらにとって、運転技術は青天井なんだな」

「俺たちも負けられないぞ」

「わかってるさ」

JRFの機関士は、目を鋭くした。

「ホームチームが、アウェーチームに負けるなんて、まさに恥だぜ。

俺たちもいつも本気だが、これから、そのなかのさらに本気を見せてやる。

俺たちも、青天井でいく」

「おうよ！」

「開店おめでとうございます」

北急沿線事業部の黒田が、北急系のショッピングモール・恵日菜エビシティに開店した『ポンポントレイン恵日菜』のオープンに花束を持って訪れた。

「恐れ入ります。計画停電でオープン初日から一時閉店しますが、今日は夜の9時まで頑張ります」

ポンポントレインの社長・下河が花束を受け取る。

「しかし、案外盛況ですね。こんなときだからオープンセレモニーができませんでしたが」

「いえいえ、そんなことは些細ですよ」

「でもお客さんが多くて、安心しました」

「嫁に言われちゃいましたよ。電車の運転状況がいつまた不安になるかもしれないのにお客が来るだろうか、下手したら帰りの電車がなくなって駅で寝るしかないかもな、っていったら」

黒田は丸い身体を震わせて笑いながら言った。

「駅で寝るしかない、じゃないのよ。駅で寝れる人たちでもない。あなたたちは、むしろ『駅で寝たい人』たちでしょ」だって。

我が嫁ながら、よく理解してるなと思いましたよ」

下河も笑う。

「不謹慎かと思いました。それに中古販売用の中古模型のネタ集めも大変でした。

くじけそうになったとき、黒田さんからのメッセージで奮い立ちました」

「そうだと嬉しいですよ。

是非頑張ってください」

この模型店はミュージアム要素を持っていて、北急の歴史展示や、引退した北急の電車の運転台が飾られている。

「恵日菜の運転所のみんなも喜んでいきますよ。近くに模型店復活ですから。

お世話になります」

「こちらこそ！」

下河はパソコン1台で鉄道模型の中古の通販から身を立て、今では秋葉原に自社ビルを建て、全国展開まであと少しまで支店を増やすにいたった、「鉄ドリーム」の人間である。

店にレンタルレイアウトを置くアイデアも彼がパイオニアの一人なのだ。

「シールブックとかもけっこう売れてますよ。

北急なりきりセットも。

黒田さんの開発に携わった北急グッズは好調です。

やはり『わかってる』かたの作るものは、みなさんにつたわりますね」

「恐縮です」

黒田は頭をかいた。

「では、これ以上お邪魔してもいけませんし」

「え、いいんですよ」

「いえいえ。また別にお時間を取って、お話ししましょう！」

「よろしくお願いします」

そして、黒田は店の写真をブログ用に撮影して、店をあとにした。

彼の仕事、北急レイルウェイズもまた、今日から少しずつ営業を再開するのだ。

そして、同じ門出が、根岸の製油所でも行われていた。

「これで被災地の寒さも少し楽になるだろう」

ついに、新潟・青森経由の灯油輸送列車が出発する。

「ああ。JRFも総動員でもっていってくれる。

仙台港の回復までこの大回り輸送は続くが、負けるものか」

「ああ」

機関車の汽笛が鳴った。出発合図だ。



そして、その後ろに、灯油を満載したタンク貨車が続く。

「お、いつの間に」

「いいな！」

最後尾の貨車には、「ガンバレ東北」とチョークで描かれていた。

「まさに後部良し、だな。

無事届いてくれ、本当に」

「届くさ。それをリレーするのが、俺たち鉄道員、プロの仕事だ」

原発での戦いは、言うまでもなく激しい戦いだった。

みな、被曝量制限の中、壊れた施設に突撃し、作業し、そして制限になる前に離脱する。

それをみながチームに分かれて、交代で行う。

「まさに城攻めだな」

彼は天井の吹っ飛んだ原発建屋を待避所から見ていた。

「でも相手はゴジラじゃないんです。動き回ったり、よけたりされませんから」

「そりゃそうだ」

みな、限界の中、笑った。

自衛隊、消防、そして東電と初芝などのメーカーの人間で、チームが作られている。

施設を回復し、ヘリでホウ酸と海水を落とし、消防車で放水し、さらに無人偵察機やヘリで状況を調べ、また施設にとりついて回復を図る。

まさにチームプレイが動いている。

医者がみなを身体を気遣う。

「がんばれ。でも、無理は絶対にするな」

そのときだった。

「これを乗り切れば日本の原発の実績になる、って言ってるよ、うちの上司」

「ああ、そいつもまた、頭がおかしくなっているんだ。冷却系が動いてないんだ」

「ホウ酸もぶち込んでやりたいな」

みんな、笑った。

苦しいときほど、みな、笑うのだ。

それが一つの発見だった。

「温度が安定してきていますが」

「まだ水素爆発があり得る。でも、水蒸気爆発はおきなかった。

まさか自分が回収した炉を攻めることになるとは思わなかったが、でも勝手は知っている炉だ。絶対に落ち着けてやる」

彼は、そのあと続けた。

「そして、帰りはロマンスカーの前展望で凱旋帰宅だ。そう約束した」

「だからそれ、なんかの死亡フラグみたいですよ」

「いいじゃないか。感動の結末のフラグかもしれないし」

「ああ。どっちもありえるが、でも原子の灯を扱ってきた俺たちの力、甘く見るな、ってことだ。

失敗はある。まさかあれほどの津波にやられるというのは予想外だった。

だが、それからあとは、すべて想定内だ。

悪いことも、想定したなかの悪いことでしかない」

彼は、そういいながらPCでモニタリングのデータを分析している。

「そして、その想定は、ちゃんと霞ヶ関にも伝わっている。

これまでできなかった実際的な話が、少しできてきた。

間違いなく、正しくやれている」

みながうなづく。

相模大川では、北急の誇る豪華寝台クルーズトレイン・BCEとNFEの整備が始まっていた。

リネンの搬入、車内のさらなる清掃と磨きだし。

十分な整備が行われていく。

そして、そこに樋田と「彼」がやってきた。

「本当に前から乗りたかったんだ」

「申し訳ないことに、走れませんが」

「いえいえ、十分ですよ」

「では、車内へ」

中に入った彼は、感嘆する。

「このフラットラウンジカーは新しい車両だな」

「ええ。BCEも運行開始から20年近くになります。その間に少しずつ装備の更新工事を進めております」

「立派だよ。実に」

彼は車内の真鍮の輝きに触れて、満足する。

「今夜はここでお泊まりいただけるようにいたしました」

「ありがとう。実にいい」

樋田は深く礼をした。

「計画では、これをあそこに持って行くんだな。

でも機関車は出払っているだろう？

何が牽引するんだ？」

「それも手配済みですが、ここは秘密と言うことに」

「なるほど」

彼はほほえんだ。

「秘密は重荷だが、秘密めかした話は、楽しいしな」

彼はBCEの最後尾、ナハフ20の一番後ろのソファに座り、その心地を楽しんだ。

「きっと君たち日本人はこの震災から復興できる。

そのとき、また乗りに来る」

樋田はうなずいた。

「お待ちしております。そのときにはこの列車のインペリアルスイートをご用意しますよ」

彼は満面の笑みだった。

「こういうときこそ、笑顔は力になるんだ」

痛みの波及

「帰着報告します。運転士幡野、行路A-12、無事帰着しました」

「ご苦労さま」

来嶋と梅沢は、それを見つめていた。

「総務部がやってくれている。大丈夫だ。

俺たちは、俺たちの仕事を」

「わかっています。でも、理不尽で」

来嶋が悔しさをにじませる。

「世の中が理不尽なことは、それこそ今に始まったことじゃない。

そして、ただでさえ理不尽な世の中は、この被災のダメージで、さらに理不尽になっている。

今は復旧のために頑張っている。

でも、そのがんばりのあと、必ず素に戻る瞬間がある。

それが一番危ない。

辛いことだが、平常心、鋼の忍耐しかない。

釜を信じ、それを整備し、電力を、線路を用意するみんなを、信じ続けるんだ」

「はい」

梅沢は、来嶋の肩を叩いた。

「屈服するんじゃない。社長以下、俺たちはヘッドライトを灯す。その決意を揺るがすなよ。

何があっても、灯すんだ」

ヘッドライト

彼と樋田は、基地で停車整備中のBCEの食堂車でディナーを食べた。

「不謹慎かもしれないが、金があったら金を使うときだ」

「そうです」

しかし彼は、残念をにじませた。

「これで車窓が動けばなとも思ったが、考えれば1列車を借り切って、しかも普段は絶対にお客が乗ることのない基地内の列車で食事するってのも、レアな体験だ。

本当にありがとう」

樋田は頭を下げた。

北急沿線事業部の黒田は、恵日菜運転区で乙組と話をし、また沿線事業部として行っている模型化についての書類仕事をして、それを終えた帰りに、また恵日菜ポンポントレインに行った。

道路信号が計画停電で一部停電したが、ドライバーたちは互いに道を譲り合って走っている。

それをみたあと、黒田は、「ああっ！」と思った。

ショッピングモール・エビシティのほとんどが真っ暗で、営業していない。

これで模型店は経営できるだろうか。

と思って遠巻きに見た。

模型店の灯りの中に、何人もの鉄道ファンがいた。

「停電で駐車場がタダなんで、かえってきやすいですよ」

なんて不謹慎なことを言う者もいる。

黒田はそれをみながら、彼らもまた、ヘッドライトを点けているのだ、と思った。

一人で点けるんじゃない。

みなで灯すのだ。

かつて運転士だった頃のその感触が、一挙に戻ってきた。

俺は俺にできることをやろう。

それが正しい道なんだ。

黒田は、駅に戻り、家に戻ることにした。

「しかし、金曜の震災発生で、なんてときに、畜生と思ったが」

東電の配電指令室で、配電指令が口にした。

「まさかこんなオチとはね」

カレンダーを見た。

「明日から3連休なんて、実はカレンダーとか神様とかは、いったいどんなツンデレなんだよ」

みな苦笑した。

「休日は消費電力が少ない。大口の法人契約が休みになる。

この間に火力を復旧できる。

しばらく計画停電で迷惑をかけるとしても、最悪の突発停電は回避できるだろう。

本当に申し訳ないが」

しかしみんな、うなずいていた。

「広報部ががんばっている。すべてが回り出している。

復旧の道筋ができ、それにのっかっていくだけだ。

だが、そのあとには復興の戦いがあるが、それも俺たちの先輩は、のり超えたんだ」

「そうだな。そして、また平和ボケとか、くだらない話ができる世の中になるまでやってやる。

人をダメにするほどの豊かさを、絶対にもう一度作ってやる」

朝、幡野の運転するコンテナ貨物は、彼がシートのビニールを取ったEF510 501の牽引で酒田を目指している。

酒田から先は別の運転士へ交代する。

その酒田の停車駅接近通知がモニタ画面に浮かぶ。

一段制動階段払いは貨物列車では使えない。

難易度は決して楽ではないが、しかしそれも覚えた。

減速しながら進入したホームの先に、交代する運転士がいる。

その隣に、老齢の男女ふたりがいる。

なんだろう、と思いながら停車操作に集中する。

そして、停車したとき、すべてが分かった。

「ご苦労様です！」

「9983レ、定時着、機器異常なし」

「引き継ぎました」

運転士が乗るのを見ながら、涙が溢れていた。

「出発、進行！ 時機よし、9983レ、出発！」

ホイッスル一声、列車は走り出した。

それを幡野は泣きながら見送った。

そして、振り返った。

「慶太」

そこにたって、待っていたのは、別離した両親だった。

「立派な執務ぶりだ。

お前は、一人前の、鉄道員だ。

立派だよ。よくやったな。

お前も頑張ったな。

嫁さんにも会おう。

家は流されたが、無事避難できた。

また家は建て直せる。

その時は一緒にやろう」

幡野は「と、」と言いかけて、振り切った。

「まだ勤務中、ですのぞ」

父も母も大きく頷いた。

幡野は向きを変えて、運転士詰所に向かいながら、声をこらえて泣いていた。

来嶋と梅沢も、みなハッピーエンドを信じて、甲組の技を発揮し続けている。
その留守の北急を、乙組たちが運転する。
駅務も電力も保線も、みんながんばっている。

「来た！」

盛岡貨物ターミナルでは、やってくる機関車牽引のタンク列車に、皆が歓声を上げていた。
先頭の機関車EH500には、「がんばろう東北」のヘッドマークがある。

「これで避難したみんなが暖まれる！」

東北の夜の寒さに耐えてきたみんなだった。

そのみんなが、ゆっくりと進入する列車を、涙しながら見ている。

後尾の「東北ガンバレ」のチョークの文字に、またみな感涙した。

未だ闇の中、しかし我、光を灯す。

「そしてまさかだが」

北急相模大川にきたのは、なんとJR貨物の貨物用機関車・EF200とEF210だった。

「貨物機関車のこれに我々の豪華クルーズ客車BCEやNFEが牽引されるなんて」

「仕方がないさ、全部出払っているんだ。

でも、向こうについたら、釜は旅客釜になるらしい」

連結作業が行われ、BCEとNFEが出発した。

そして到着したのは、東北への入り口、黒磯駅だった。

そこには、もともと限界集落だらけだったとある村が、村役場ごと避難してきていた。

2本の列車は、皆を載せた。

そして、ヘッドマークがついた。

それは、BCEは「きぼう」NFEは「みらい」の列車愛称を、ヘッドとテールに掲示した。

そして、両列車はメロディーホイッスルを鳴らし、走りだした。

行き先は、宮崎駅。

そして、みなは九州の経営破綻で休業中の大規模リゾート施設・ネクスアースに向かう。

「九州にもう土地は買う算段は付いている。

そこに、理想の村をゼロから建設する。

それがネクスアース計画だ。

都市計画ではなく、農村計画の実証試験として、北急経済研究所が計画していたのを具体化する。

歩いて回れる中心市街、医療の充実した高齢者住宅、そして若い家族向けの住宅。

そして仕事も。放棄山林の林業と、放棄された農地を用意した。

自立した、最新鋭の農村。

もちろん制約が大きかったんだが、あの村が応じてくれた。

コミュニティをそのまま移動することになる。

これまでの歴史を置いていくことになるが、彼らは頷いてくれた。

感謝だよ、本当に」

樋田がそう言うのに、秘書は頭を下げるが、そのとき、気づいた。

彼のPCには、安否情報があり、メモしてあるのと同じ名前が、「死亡を確認」となっていた

。

「だから屈してたまるかと思ったんだ」

樋田は口にした。

冷静な秘書の彼女も、啞然とした。

「奇策の2日目の全線連休を教えてくれたのは、彼だ。

浅野太地。

防災学の研究で、とあるパーティーで一緒になって以来、鉄道の防災を議論し、プライベートでも家族ぐるみの交流があった。

彼は、三陸のとある漁港で、防災の講演をするために宿泊中だった。

震源に一番近いところだ。

避難するまもなく、津波に飲まれた。

講演を頼んだ方と連絡をメールで取った。

やはり、だった。

皮肉すぎる。

だから、私は闘志を燃やした。
彼から得た知識を、総動員した。
決して屈しないことにした。
ライバルと思った、彼に負けないために」
「そんな大事なことを、なぜ！」
秘書は大声になっていた。
「私が悲嘆にくれるわけにはいかない。
皆を預かる身として。
経営者とは、そういうものだ」

社長室の外、秘書室の全員が、もらい泣きに沈んだ。

「そして、この計画も彼と立てていた。
今そうすべきと思った。
そして、「おさいふ」の投資家を通じて、世界トップランクのコンピュータOSの、マクマイクログ社の会長を呼んだ。
それが、彼だ。
彼は、OSで財をなしたあと、進行波炉、PWRという最新の原子炉を開発する松芝に投資している。
彼も今回の事態に、関心があった。
日本の原子力工学が減びるかもしれないからだ。
現在の人類は、原子の火を侮っても、怯えても生きて行けない。
まして、PWRは電力不足に足を引っ張られての貧困を、解決し得ると期待されている技術だ。
だから、呼んだ。
浅野だったらそうするだろうと。

そして、彼は、期待したとおりにマイジェットでやってきて、檄を飛ばし、松芝に開発継続を訴えた。
PWRの実験は今のところ順調に進んでいる。
日本で開発できないなら、どこか別の国を買ってもいいと。
もちろん様々な発電方法を組み合わせるのは必要なことだ。
しかし、原子力以外に、まだ人類は信頼できる強力なエネルギーを手にしていない。
選択肢は、あるようで、ほぼない。
人類の未来を、閉ざしてはいけない。

そして、浅野がもうひとつ言っていたのが、農村・山村の荒廃、限界集落化の解消だった。
それを講演しに、あそこにいったんだ。
それには土地問題、エネルギー問題、すべてが関わっている。
難しい問題だ。しかし、これができれば、首都移転を含めた、本当の国土計画、防災計画が進む。

このネクサース計画の実施は、彼の遺志だ。
だから、私はなんでもしようとした。
無理な決断にも、迷いはなかった。
そして、みな、それを完遂してくれている。
ありがとう、みんな。
本当に、君たちの会社の社長でいて、よかった」

皆、泣いていた。
「その涙は、もう十分だ。
前を見るんだ。
今日はスーパームーンの日だ。
月が地球に再接近する。

その月の下を、彼の遺志をうけて、我々の心を込めた列車が走っている。
それが、何よりも供養だ。
そして、彼には、私も、みんなも絶対にまた逢える。
それが、本当の親友というものだ」

嗚咽の中、樋田社長はいった。

「涙はもう枯れてしまった。
でも、もうすぐ夜が明けるんだ。
悲しみと辛さはあるが、それを超えて、皆ここまで来た。
それを、これからもつないでいくんだ。
俺たちは、みな、その使命を持っていて、そして、目覚めたんだ」



新宿の夜が、白み始めた。
そして、遙か離れた山陽本線を、夜明けの朝靄の中、機関車が力強くヘッドライトを灯しながら、走り続けている。

2011年3月22日、被災から12日経過した現在。

避難なされた方々の多くは、避難所での避難生活をしている。

だが、仮設住宅の建設はあちこちで始まっている。

計画停電はまだ実施されている。

ガソリンの需給は改善しつつある。

原発は電源を引きこんでの改善を図っているものの、放射能の漏出と、それよりもっとひどい風評被害が発生しつつある。

また、発言や行動に自粛を求める圧力に多くの人々が萎縮し、逆に強権で多くの停電による困窮者がいるなか、ドーム球場で町一個分の電力を使うナイターが強行されかけたりした。

新聞は不安を煽り、雑誌はさらに過激になり、またネットには、多くの陰謀論とマスコミ不信から始まった不信スパイラルの罠に陥る人間が、底のない不安とウツに沈んでいく。

3月18日時点でこの震災の死者・行方不明者1万6893人、重軽傷2513人、避難者は38万2586人。しかし、その22日時点での集計の発表はまだない。、

悲しみの中、復旧の段階から、復興に向かう方向は見えている。

そこから先は、この作者の私も未だ見えない。

だが、私も、妻と決意した。

なにがあっても、ヘッドライトを、点し、それを続けよう、と。

3月22日、19:43、厚木市山際、第4グループの計画停電の闇の中、記す。

(終)

現時点でのあとがき

この作品は基本的にフィクションですが、現実の私YONEDENこと米田淳一のTwitterのログをもとに作っております。

よって時刻などは現実の時刻に基づいております。震災の出来事の時刻はTwitterのタイムラインを反映しています。しかし北急電鉄は架空の鉄道会社であり、小田急電鉄および北大阪急行さまとは何の関係もありません。よってこの小説を元に現実の企業さまなどに問い合わせをなさらないようにお願いします。

私自身、この震災を実体験し、そしてその中でTwitterという臨場にちかく、それでいながら所詮通信手段であるもので事態が進んでいくことをまた体験し、私なりに考え込みました。

避難状況、デマの発生の様子、まるでその場にいるかのような、そして実在ではないけれど何か事態を見守れる場所にいるような体験をし、そしてそれによって多くの悲しい思いも、辛い思いも、そして救いも見ました。

たかがTwitter、されどTwitterの中、かつてなかったこの大震災は、今日（3月19日）時点ではまだ現在進行形です。

そして、それはまだまだ続くでしょう。そしてその中で、教訓は忘れられ、また同じような苦しみがあると思います。

しかし、それでも人類は、特に日本人は、危機を管理するということを学ばねばならないのです。

危機管理と言うことについて、多くの方が誤解しています。

危機そのものを管理できるのは神様だけです。

地震を想定した設備など、どんなにやっても結局は自然の脅威の前には無力です。いや、万全と誇ったときから危機は用意されるのです。耐震性をあげることや減災はできますが、しかし完全に防ぐことはできないのです。

そこで危機管理とは、危機そのものを管理するのではなく、起きてしまった危機をどのように損害を局限し、そして致命傷になるのを回避し、そして回復につなげることなのです。

そのためにも、少しでも多くの情報が必要だと思っています。

私自身、かつて山手線のドア故障のTweetを勘違いしてRTして、デマの伝播に荷担してしまいました。いや単にリツイートしただけなのですが、そこで私はTwitterとGoogleリアルタイム検索を組み合わせることなどで、Twitterの大きな限界と可能性の両方を見ました。

これからこういうメディアは増えていくでしょう。Twitterがダメになっても人類はこういったメディアを開発し続け、そしてそれを使い、多くの失敗をかさねながら進化していくのです。

我々が生きている限り、世界は駄目なSFのように終わらないのです。そして万が一人類が絶滅

するとしても、知性は生き残り、受け継がれるのです。いや、受け継がなければ人類は人類ではないのです。

大げさでしょう。笑いたければ笑って結構です。でも私は描きます。
見知らぬ誰かが読む限り。
そして、笑われても、私は描きます。

まず1日目を描きました。
しかし、作品中の鉄道員は架空です。

でも、これに近い人々は、現実存在します。

我々は今、まだまだ復興ではなく、復旧の段階にいます。

まだ先の見えないことを描いています。危険な書き方ですが、私の描くこと責任はすべて私にあります。

そして、私なりに、鉄道においては標識灯でしかないヘッドライトを、灯そうと思ったのです。大げさですが。

この話は続きます。しかし、出口のないトンネルはない、と信じ、私は書き、灯し続けます。

お読みくださってありがとうございました。つまなくてすみませんが、終わりまでできればおつきあいいただければうれしいです。

きっと、この小説の中にも、我々の目指すものが、きっと顕現すると思います。

では。

#3月20日時点のあとがき

まず、謝ります。3月12日の章の描写は、ほぼ100%の私の状況からの想像ですので、実在の鉄道会社などにお問い合わせなさらぬようお願いします。

いくつか事実と重なることもあります。かなり不正確だと思います。

しかしこの小説の現実に近い中で、それでも創作であり、それでも全くの嘘ではないという立ち位置をご理解いただき、ご容赦をお願いします。

この件は取材しようにも鉄道会社に取材するのは各会社さまが今の時点でも大変なので、大変申し訳ないことなので、おそらく取材は今後も遠慮すると思います。

じゃなぜ書いたのか。

それは私なりに、現実を見ながら想像し、それが偶然合致した、それぐらいに思ってください

。

北急電鉄は私の考える架空の理想鉄道です。それ以上でも以下でもありません。

しかし、私は理想と、鉄道を書きたい。その気持を抑えこむことができないのです。

作中で社長が「俺は地獄行きだ」と言っていますが、そっくり私もそうです。

私も、地獄に行くつもりで書きました。でも、地獄に行ってもまた、理想の地獄について小説を描くでしょう。小説書きとはそういうものだと思っています。

この作品はまだ続きます。作品としてのめどは立っています。

が、しかし現実は何も立っていません。復旧は進んでいますが、復興へは長い道が待っています。

罹災した皆さん、お詫びしながら、皆さんの町や村の復興と、その未来が明るくなるよう、私なりに努力します。

そして罹災し失われた命に。私は遅れますが、そう遠くなくいずれお会いしますので、その時に改めてお詫びします。そして、現在、ご冥福をお祈りします。

すべての命は、いずれ失われます。しかし、永遠なものは、世界のなかに、必ずあります。

私はそれを確信しています。

そして、命も本質はまたそうだと信じています。

では。